

514
102

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10¹⁸/₁₀ 1 2 3 4 5

始



長野商業會議所編纂

善光寺案内

長野市

金華堂藏版

574-102



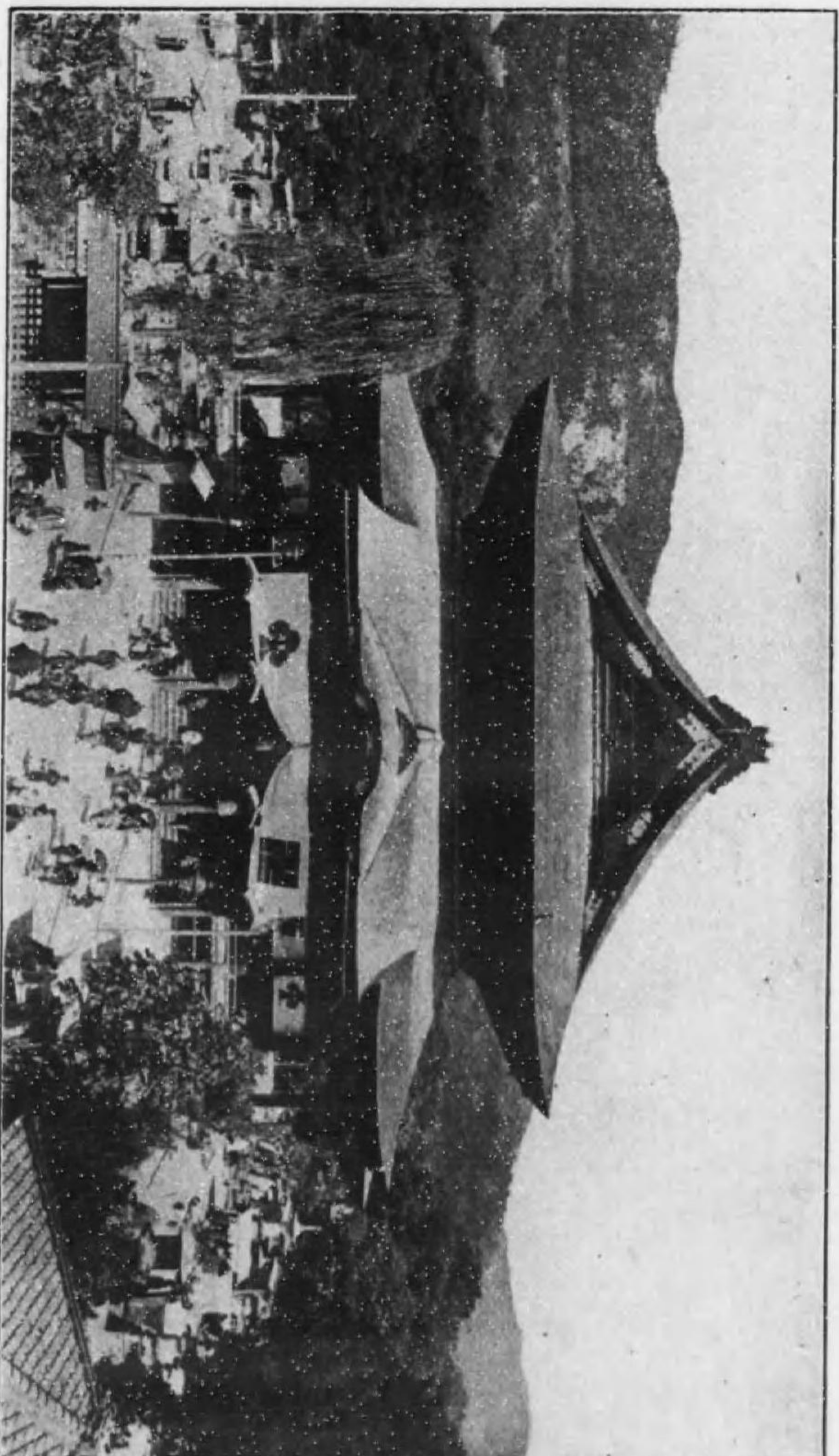
善光寺案内

長野商業會議所編纂

長野市

金華堂藏版

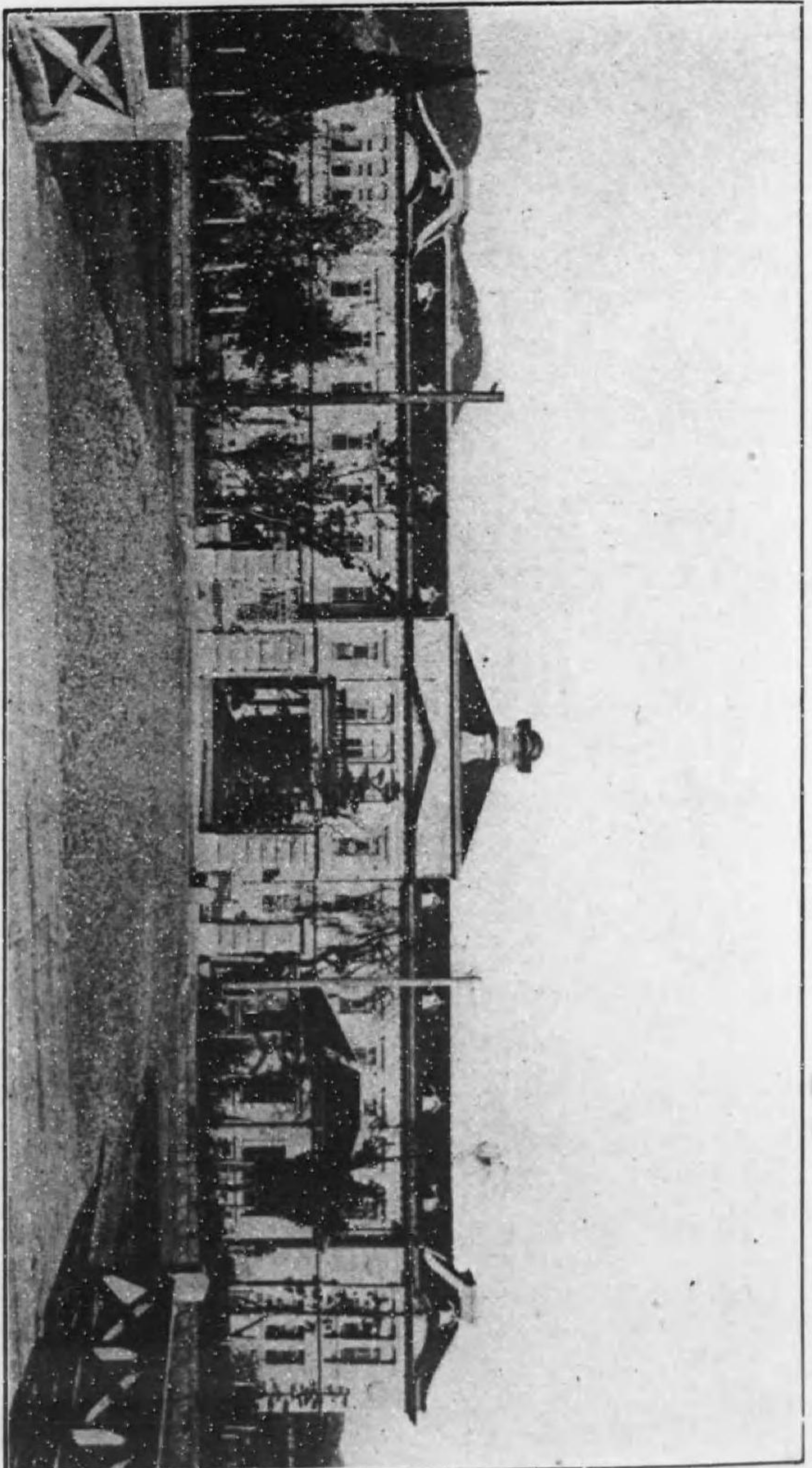




善光寺木堂

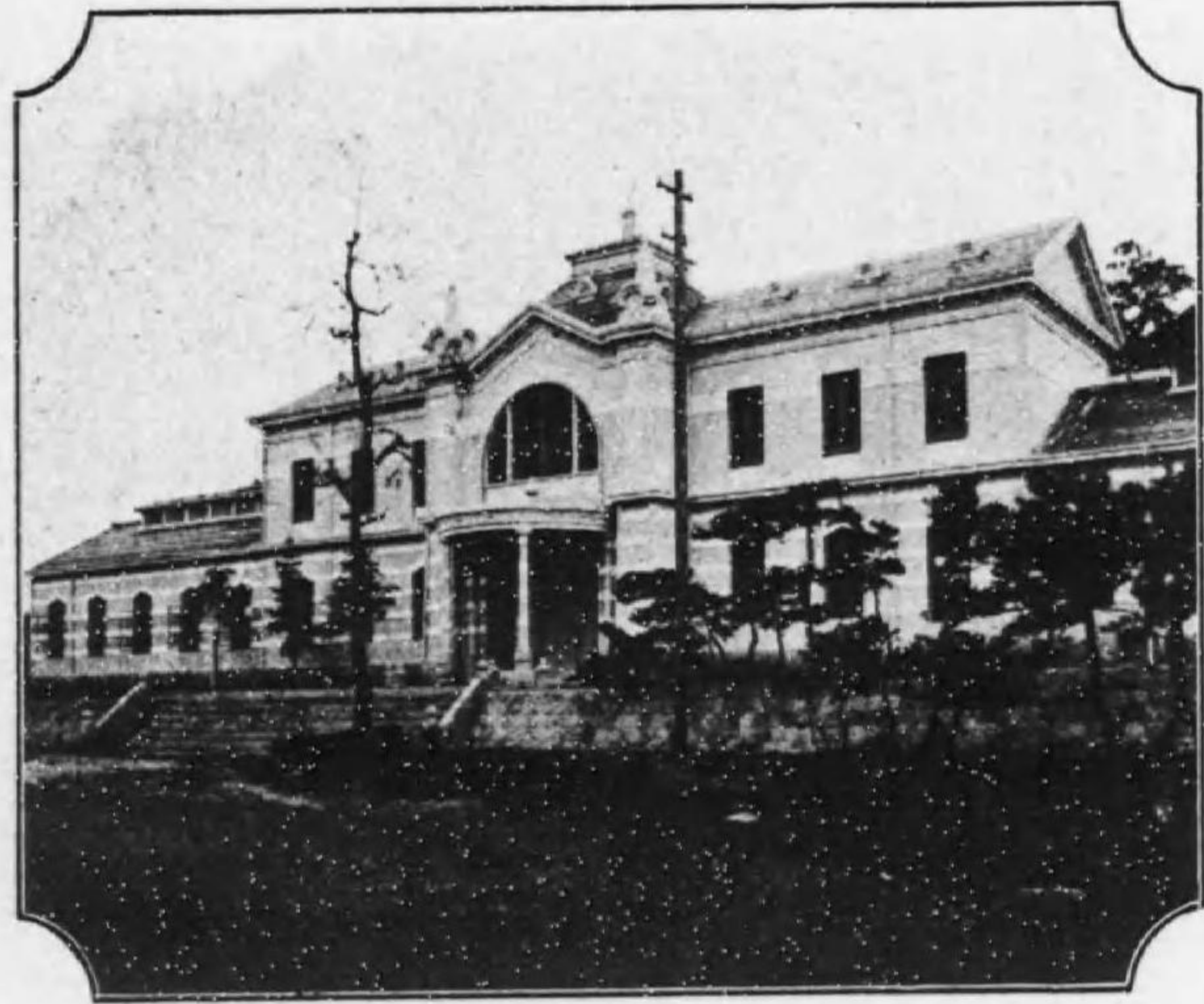


善光寺木堂



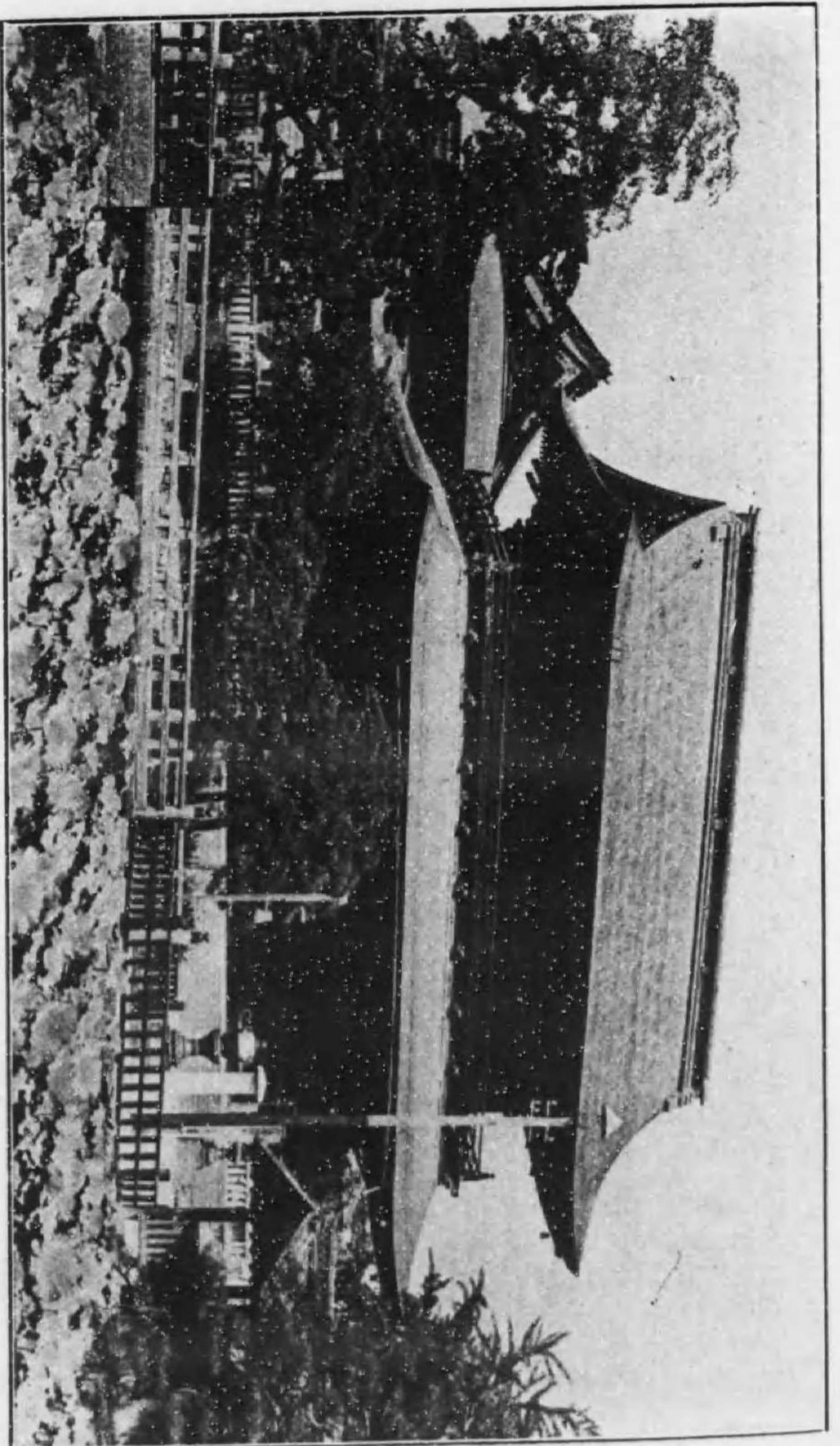
長野縣廳

所 列 陳 產 物 野 長

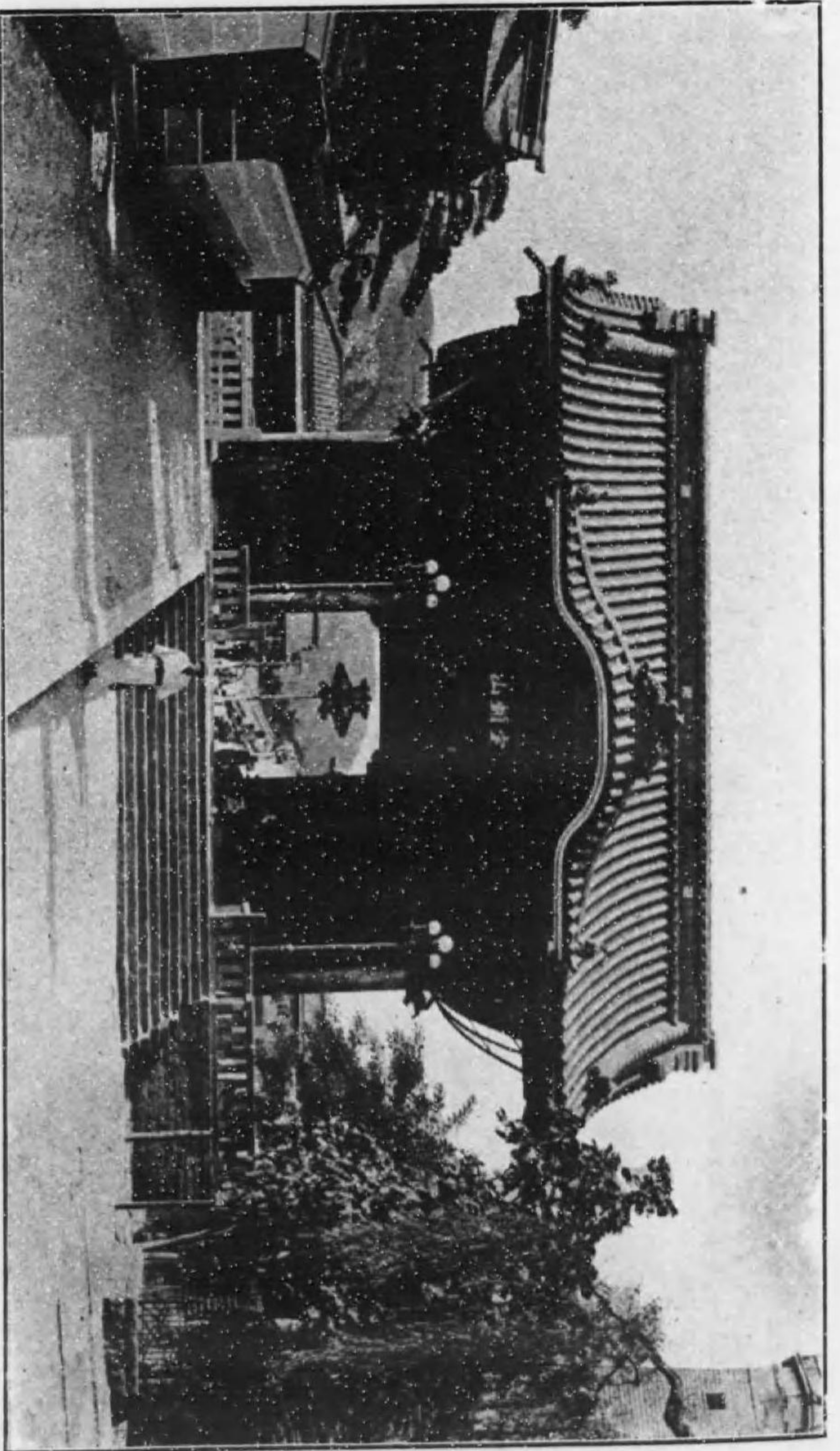


所 役 市 野 長





善光寺山門



善光寺二王門



善光寺大勸進

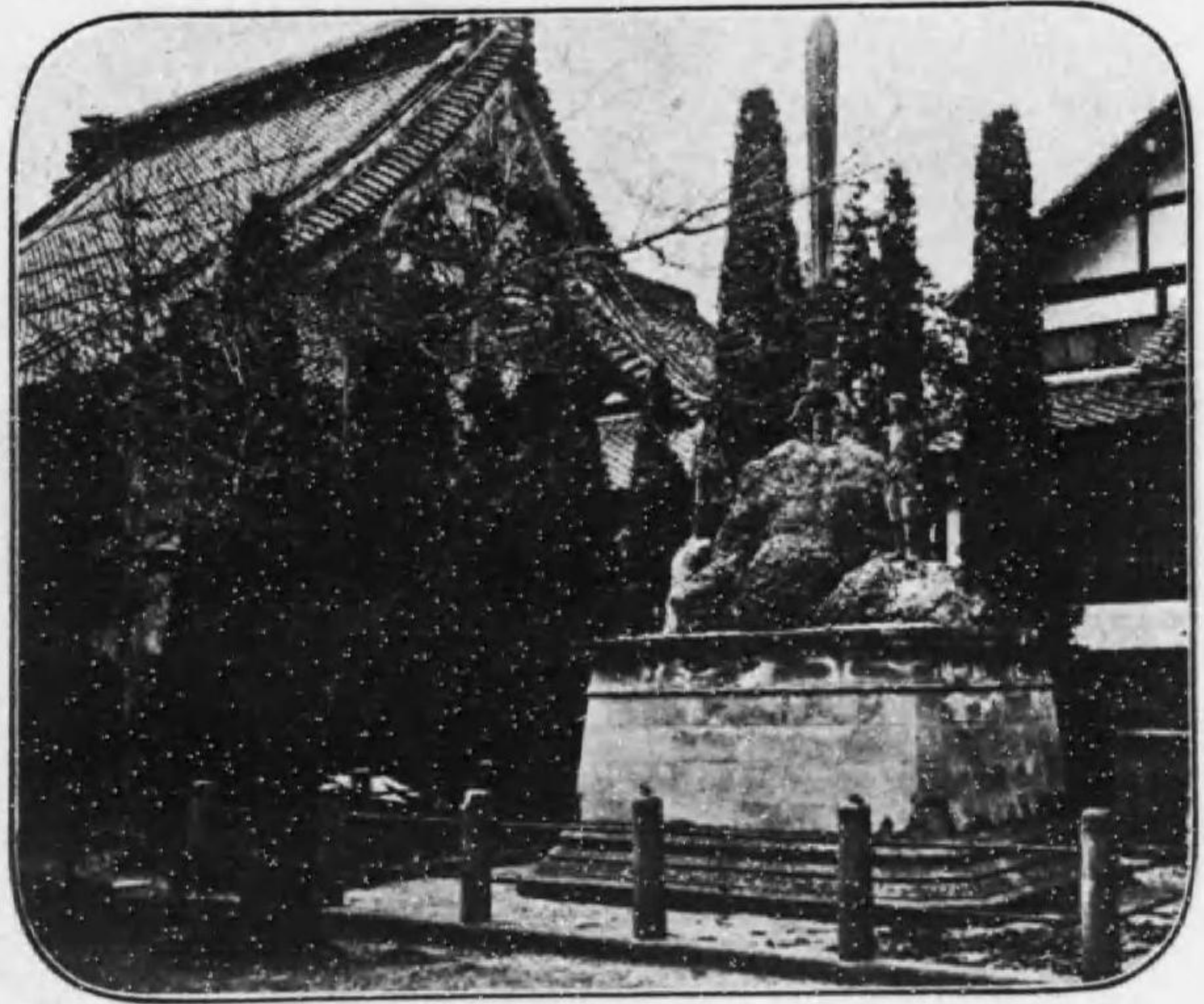


善光寺地蔵

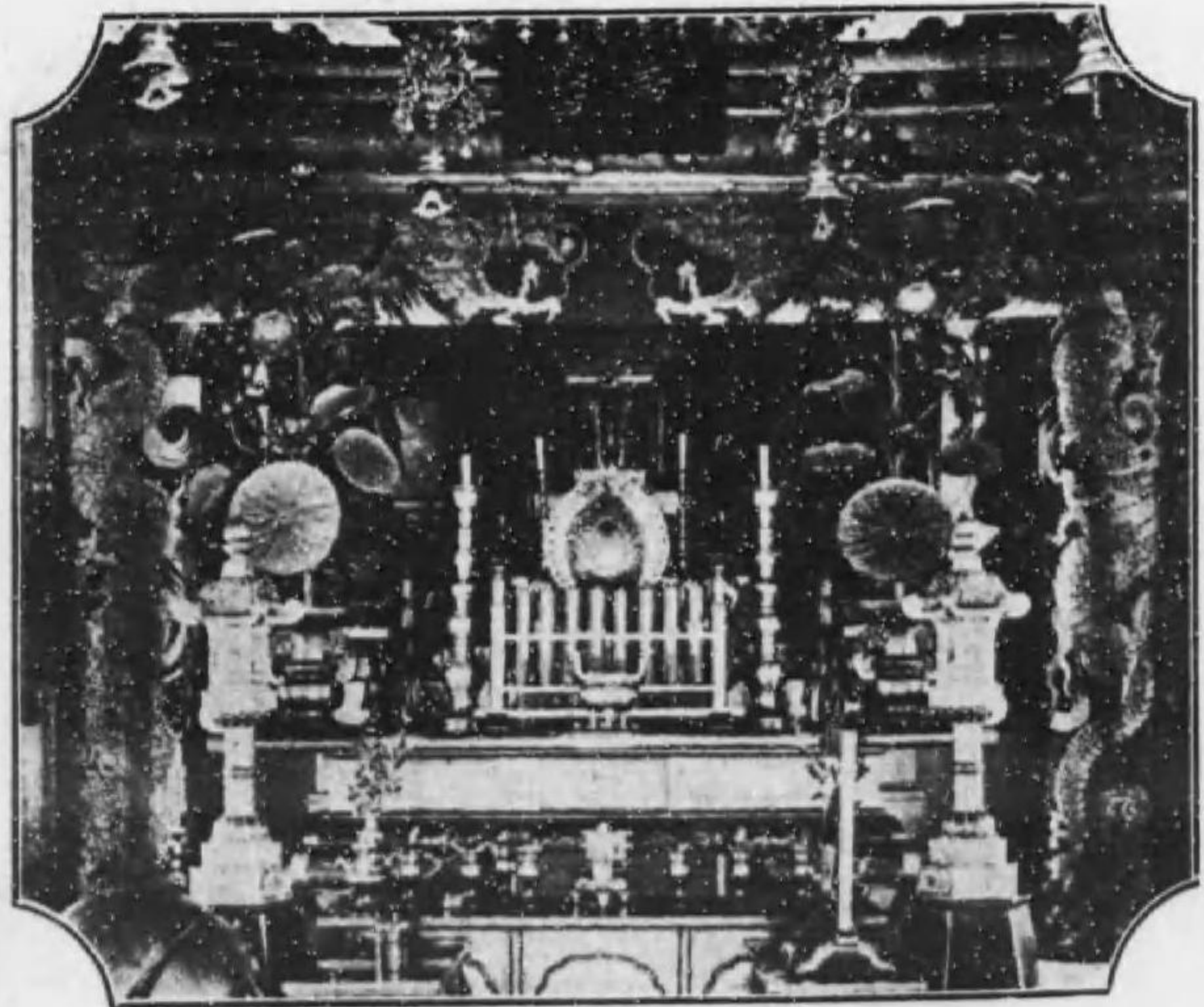


善光寺經藏

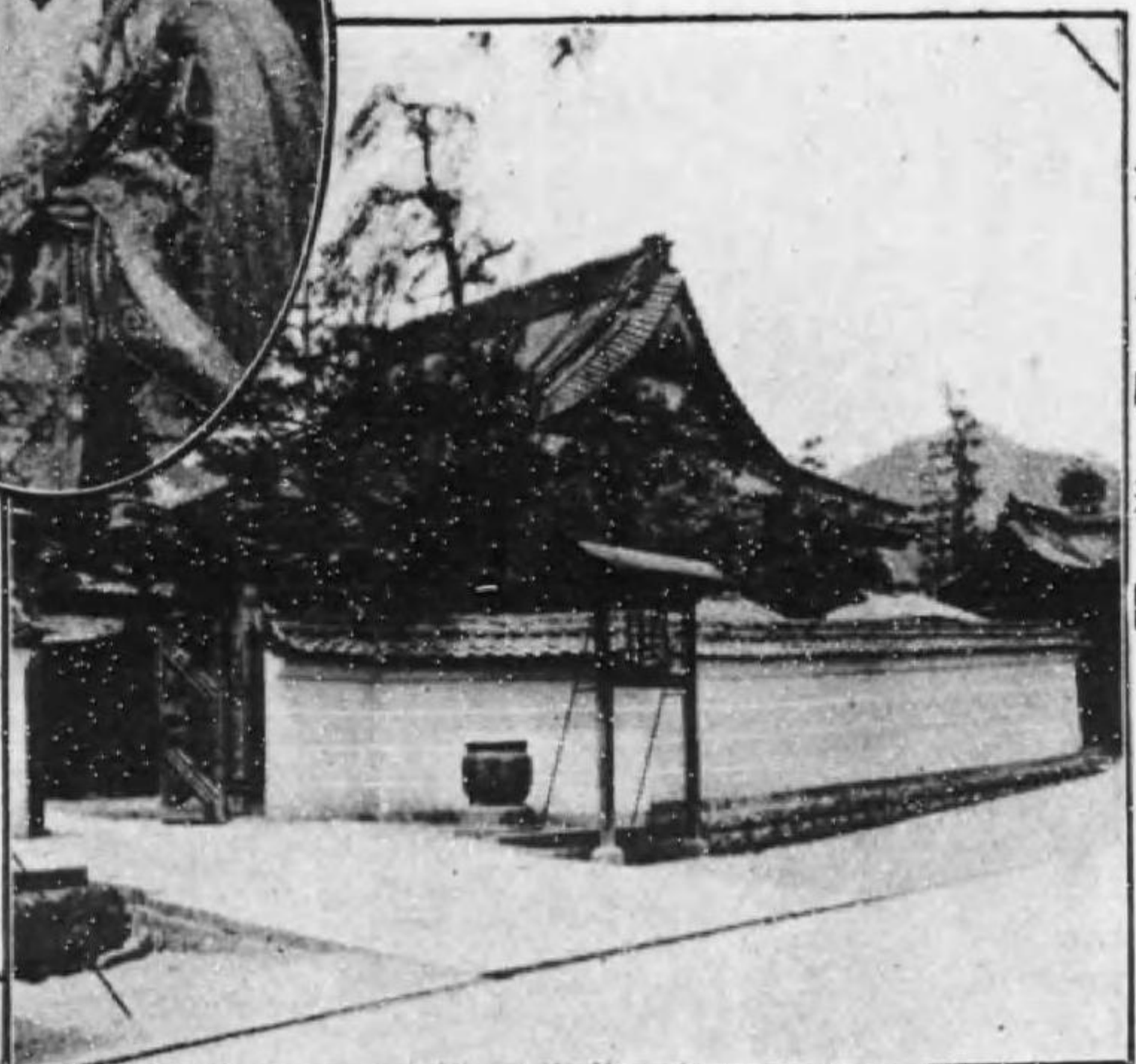
大勸進万善堂庭内



大勸進御内陣



大智榮臺下御肖像



大本願表門



奥御殿

釋迦堂



荊菴堂往生寺



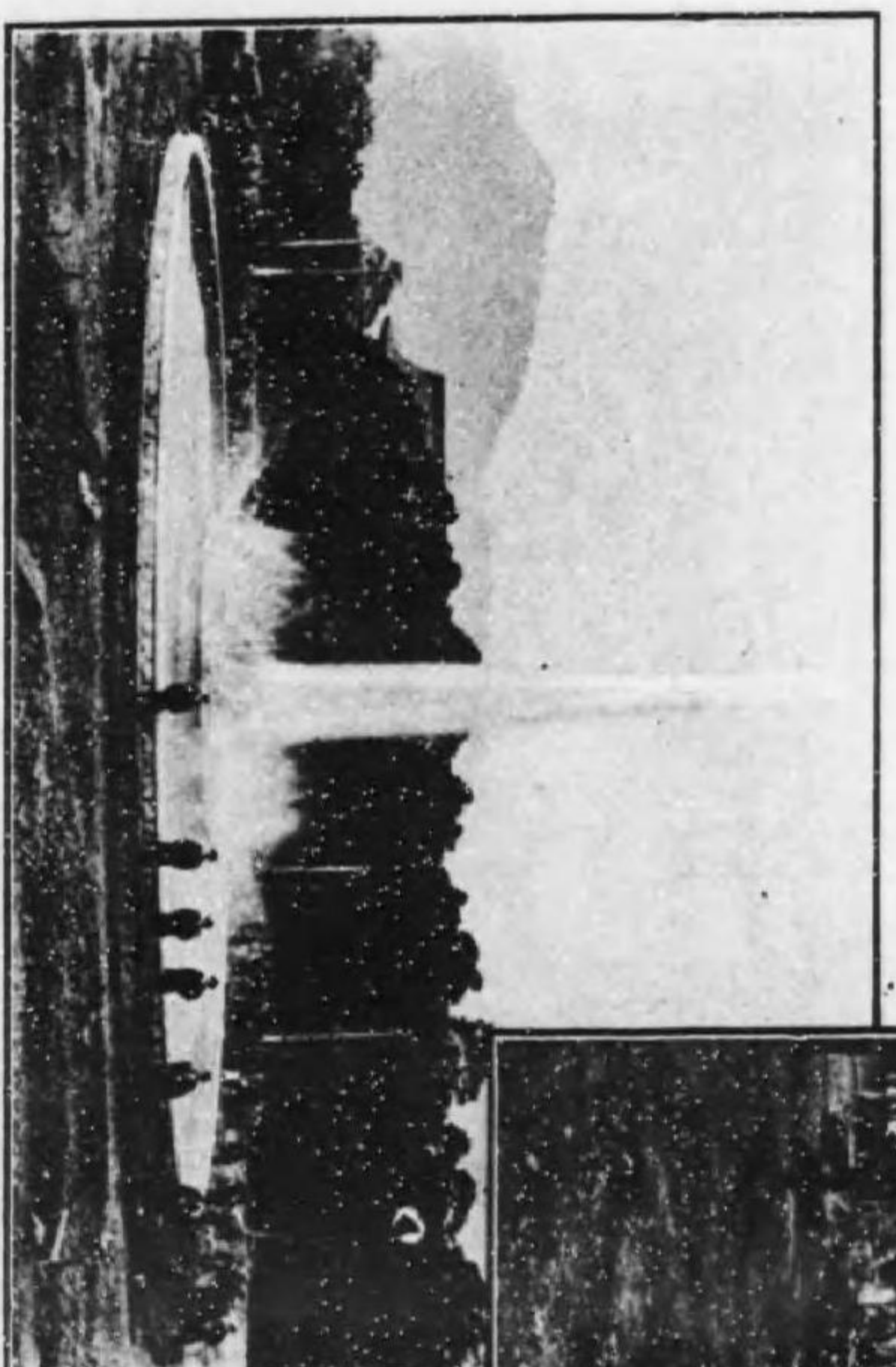
石童丸の舊跡石童町西光寺



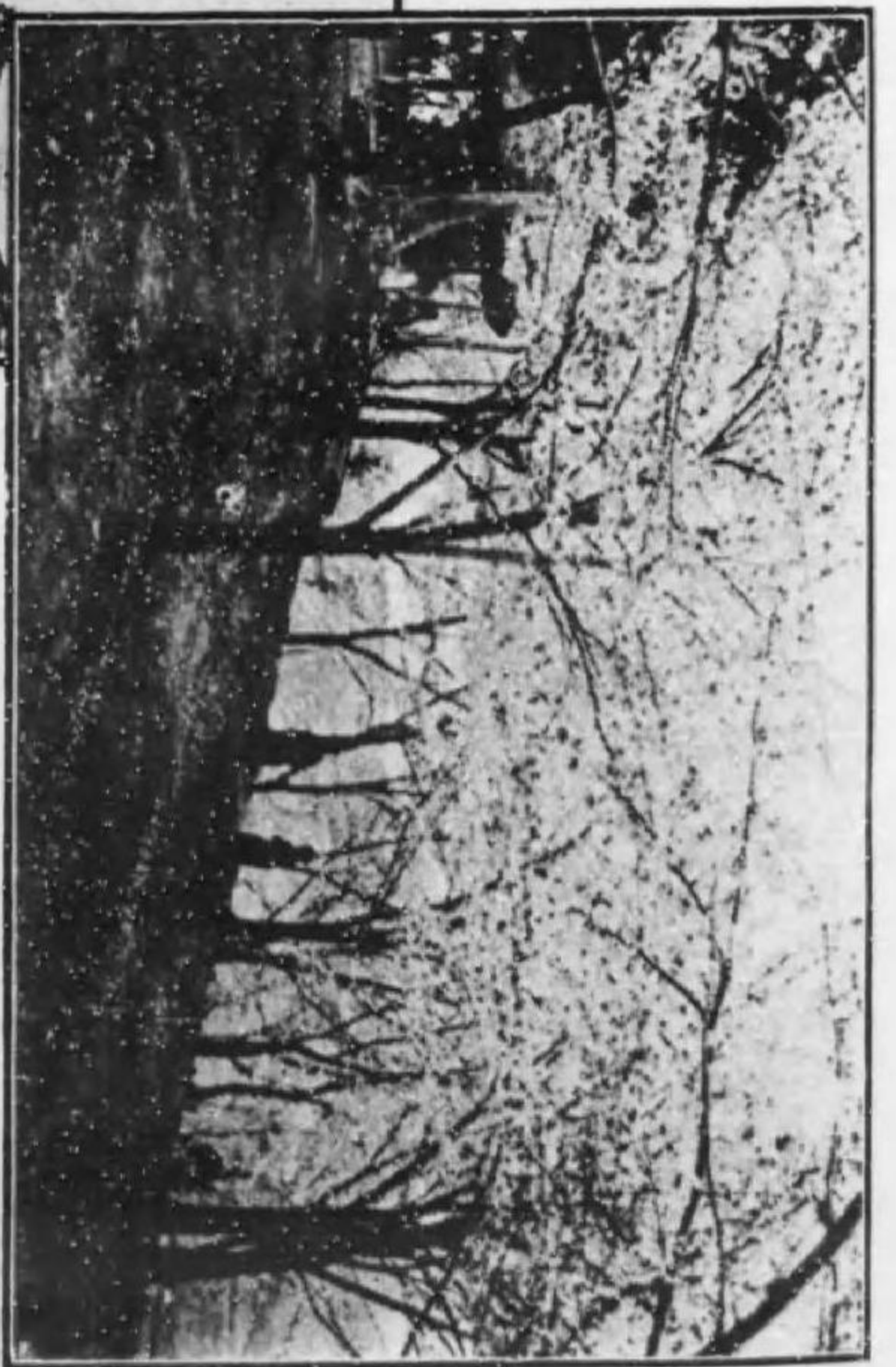
欠

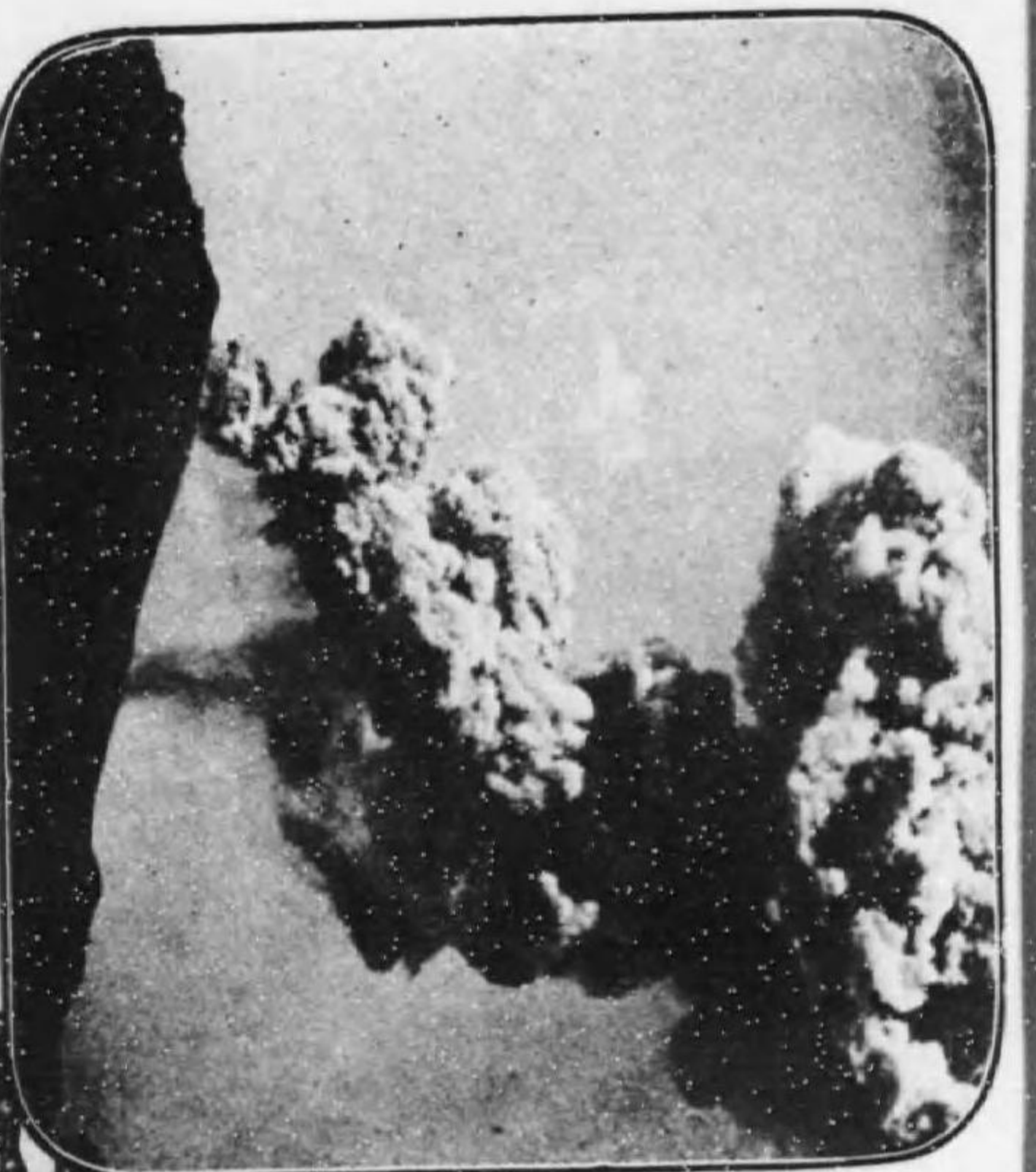
欠

水 噴

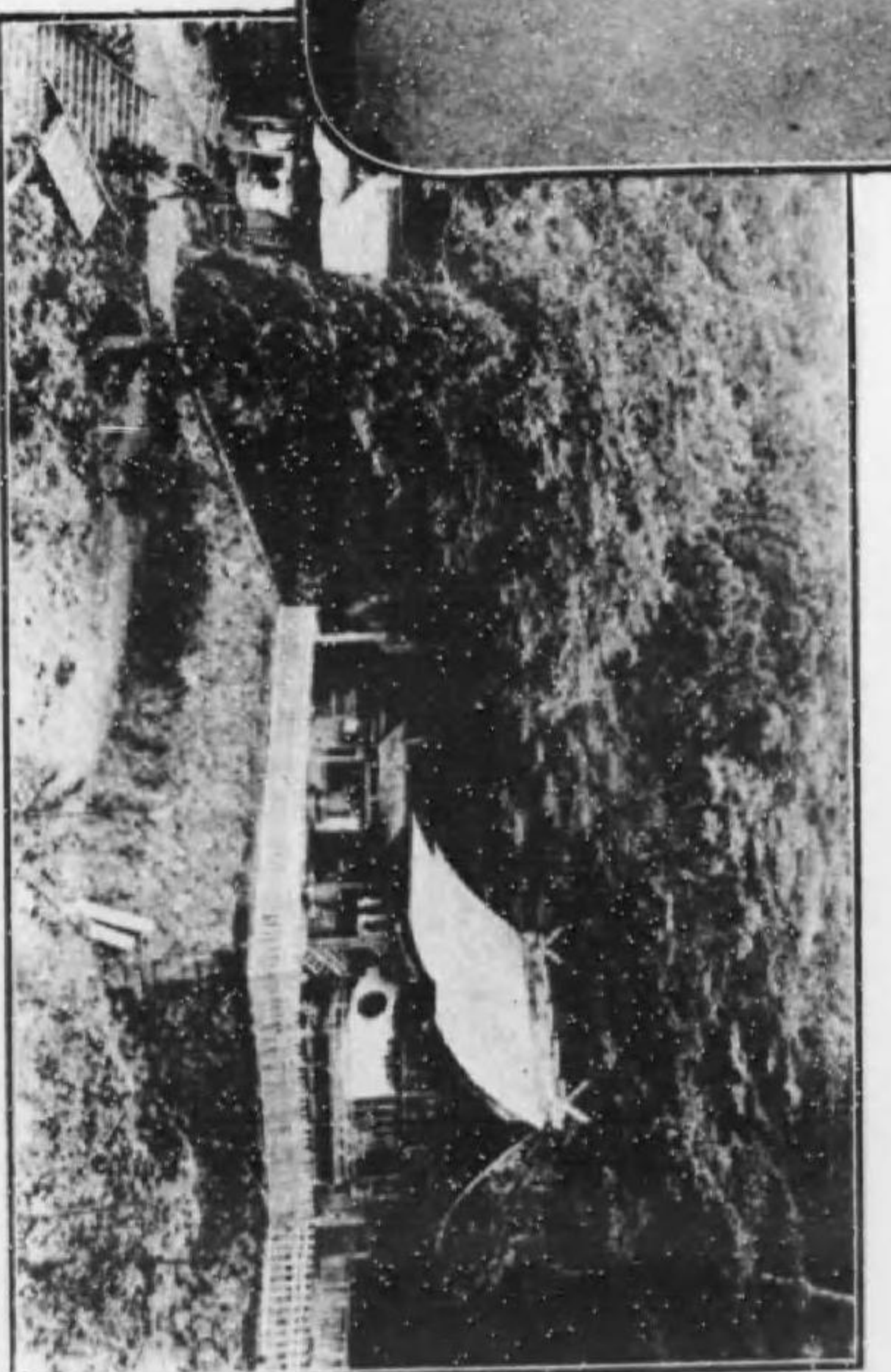


櫻の園公念紀

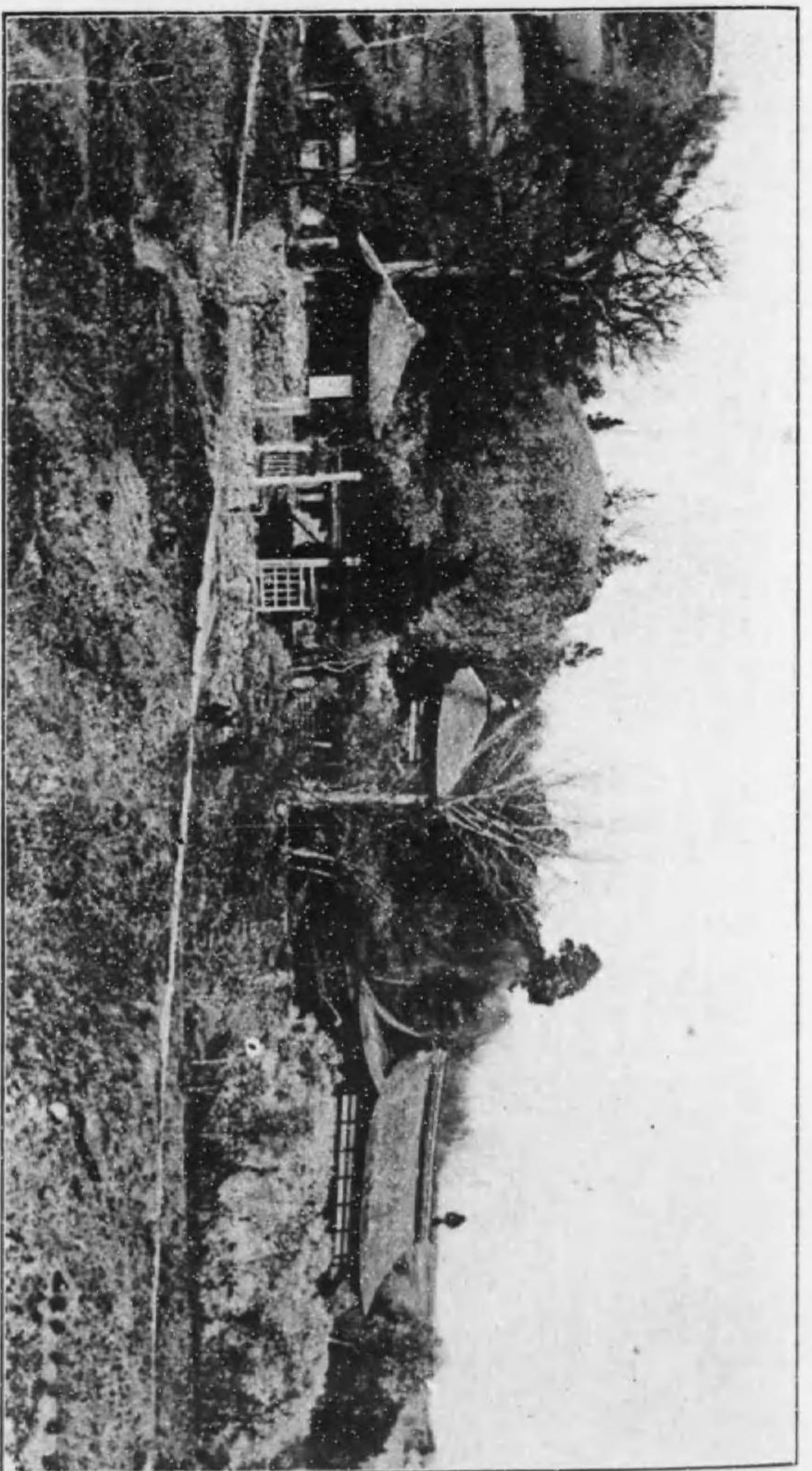




火噴大山間淺



社奥山隱戸



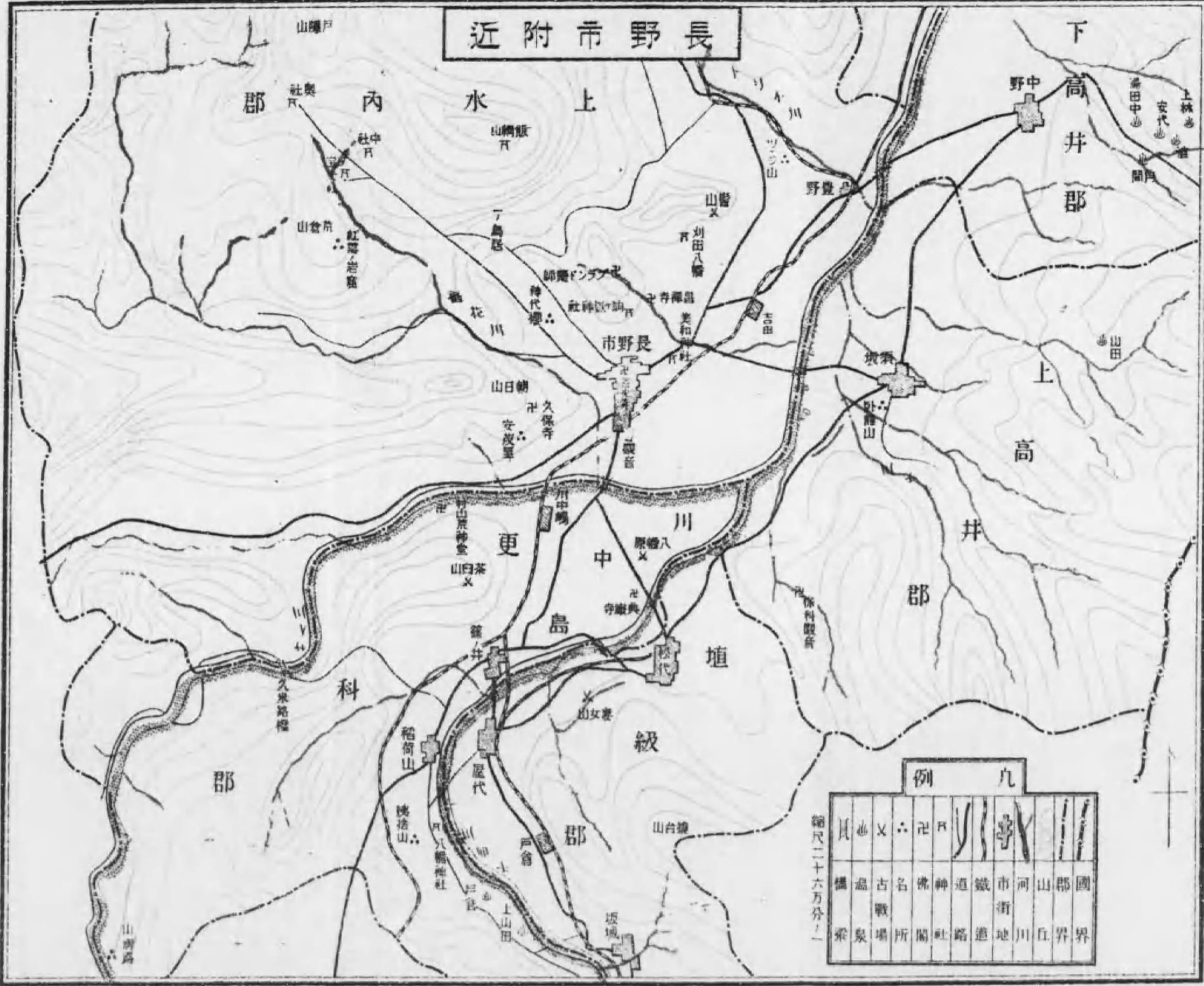
山捨娘所名の月



原幡八場戦古島中川



長野市附近



凡例

川	山	市	町	村	寺	神社	古蹟	温泉	泉
利根川	山	市	町	村	寺	神社	古蹟	温泉	泉
川	山	市	町	村	寺	神社	古蹟	温泉	泉
川	山	市	町	村	寺	神社	古蹟	温泉	泉

縮尺二十六万分之一

長野市全圖



(再版) 序

- 一、善光寺及び長野市に関する案内記は、實に汗牛充棟も音ならぬ程であるが、初版に二千五百部を刊行し、上梓後一歳ならずして之を頒布し了り、茲に版を重ねるに至つたのは獨り本書あるのみで、此點は編者の甚だ光榮とする次第である。
- 二、本書の刊行を計劃した際、之を某書肆に圖つた處、長野市來訪者の多數は、善光寺へ參詣する爲めの老翁老媪であるから、牛に牽かれて式繪草紙を喜び、多少高級なものは求めぬであらうとの事で、編者を失望させたのであるが、刊行の結果之れは全く杞憂に過ぎなかつた事を知り、衷心から欣快に堪へぬのである。
- 三、本書の初版は、編者に於ても初めての試みであり、種々不備缺漏の點が多かつたが、再版に於ては稍内容を一新し、大ひに改善した積りであるが、尙讀者の是正を得て、版を重ねるに従つて完備を期したい。
- 四、本書初版は長野商業會議所で直接刊行したのであるが、再版は乞ひに任せて書

肆金華堂より發行する事とした。蓋し普ねく頒布し得る便宜を慮ばかつた爲である。

五、本書の外、商工業に關する方面を紹介する爲め、商業會議所で「長野商工業内」を刊行し、無料で關係先へ頒布して居るから、所用の方は御申出を乞ふ。

大正十一年 晩秋

長野商業會議所書記長 小笠原幸彦

目次

善光寺縁起.....	一
善光寺の盛衰.....	九
三國一の靈場.....	七
善光寺の建築.....	元
寺内の手引.....	三
親鸞聖人手植の松.....	三
賓頭蘆尊者.....	四
瑠璃壇.....	四
三脚の像.....	四
守屋柱.....	五

忠靈殿	六〇
寢釋迦	六一
常念佛堂	六一
阿闍梨池	六二
法然上人舊跡	六二
觀鷲聖人舊跡	六三
曼陀羅堂	六三
觀音堂	六四
藥師堂	六四
弘法大師像	六四
太子堂	六四
十王堂	六四

戒壇巡り	六五
大觀進と大本願	六五
山内名所舊跡	六五
地震塚	六五
千人塚	六五
佐藤兄弟の墓	六五
爪影の彌陀	六五
大佛	六五
地藏菩薩	六五
五重塔跡	六五
駒返り橋	六五
春日燈籠	六五

護摩堂……………五五

縁起堂……………五五

二天王門跡……………五七

年中行事とお開帳……………五七

四十九名所ニ附近名所舊跡……………五七

妻科神社……………五七

姫塚……………五七

虎ヶ塚……………五七

正法寺……………五七

十念寺……………五七

時丸寺……………五七

由縁の社寺と傳説……………五八

善光寺年神堂……………八〇

往生寺……………八一

大峯山麓の古跡……………八三

頼朝山靜松寺……………八四

往生院……………八七

苜萱山西光院……………八九

牛に牽かれて善光寺詣り……………九一

著名の参詣者……………九三

善光寺保存會……………九六

川中島古戰場……………一〇一

八幡原……………一〇四

直戰場……………一〇六

次 目

妻女山……………一〇七

茶白山……………一〇八

兩角豊後守の墓……………一〇九

典厩寺……………一一〇

山本勘介の墓……………一一〇

扇合橋……………一一〇

狐塚……………一一一

首塚……………一一一

横田河原……………一一一

松代城跡……………一一三

勘介の宮……………一一三

葛尾城趾……………一一四

次 目

村上義清の墓……………一二四

高坂彈正昌信の墓……………一二五

姨捨山……………一二六

戸隠山の秋月……………一二〇

戸隠山……………一二一

戸隠神社……………一二三

夏期大學……………一二五

謡曲紅葉狩の由來……………一二〇

附近名所舊跡……………一二四

野尻湖……………一二四

湖畔の風景……………一二五

湖畔の英雄……………一二六

長野市附近の温泉……………一五二

 上山田温泉……………一五二

 戸倉温泉……………一五四

 平穩温泉……………一五五

 湯田中温泉……………一五六

 安代温泉……………一五七

 遊温泉……………一五八

 上林温泉……………一六〇

 地獄谷温泉……………一六〇

 發啼温泉……………一六一

 角間温泉……………一六一

 山田温泉……………一六三

野澤温泉……………一六三

田口温泉……………一六四

長野市附近の遊覽地……………一六四

 朝日山……………一六五

 安茂里の杏花……………一六五

 ブランド樂師……………一六六

 神代櫻……………一六七

 飯綱原……………一六八

 久米路橋……………一六八

 丹波島橋……………一六八

 西郡橋……………一六九

 御所の趾……………一六九

義平の墓……………一六九

姫塚……………一七〇

福島正則謫居址……………一七〇

保科村の國寶……………一七一

豐太閣護持佛……………一七一

臥龍山……………一七二

黒姫山……………一七二

國寶愛染明王……………一七三

大雲寺の櫻……………一七三

八幡神社……………一七四

長野市附近の町村……………一七四

安茂里村……………一七四

川中島驛……………一七五

篠ノ井町……………一七六

松代町……………一七六

産業……………一七八

附近名所舊跡……………一八〇

交通……………一八二

須坂町……………一八三

長野を中心として……………一八四

長野地方出身の人傑……………一八五

佐久間象山……………一八六

小林一茶……………一九〇

信州の俗諺……………一九四

目

次 終

木會節.....	一五
伊奈節.....	一七
桑摘み節.....	一八
絲繰り歌.....	一九
情 歌.....	一九
新磯節.....	二〇
唱歌(信州の山水).....	二〇

善光寺如來
御本尊

御秘佛緣起

御秘佛緣起

善光寺を紹介するには、先づ順序として、其本尊たる一光三尊佛の由來からして、物語らねばなるまい。

飄脱諷刺に於ては、天下の鬼才である評せられた、有名なる一茶の俳句に「信濃は月と佛とおらが蕎麥」さいふのがある。即ち其信濃で名も高い善光寺如來の緣起を按ずるに、釋迦牟尼如來在世の時、請觀世音菩薩降伏毒害陀羅尼呪經といふ經文中に、早くも如來出現の有様を説かれて置かれたさうであるが、傳に隨へば釋迦牟尼如來、毘舍離國菴羅樹園の大林精舎に於て、

多勢の門弟子を集めて佛法を説き給ふた時、毘舍離國に月蓋長者といふ者があつた。月蓋は五百の長者中の長者であつたから、富貴自在で金殿玉樓に住み、榮耀榮華の限りを盡したけれど、年五十に至るまで夫婦の間に子供がなかつたので、夫婦は妙なからず、これを心に悲しく思つて居る折柄、五十一歳の時に、初めて女子をもうけたので、其喜び譬ふるにもなく、名を如是とつけ、掌中の玉と寵愛したのである。

やがて如是は十三歳になつたが、父の月蓋は、娘の愛に溺れ、千金の寶をも買つて與ふことはあつても、性來慳貪邪見の者であつたから、金を蓄ふるこぼばかりを心につけて、佛法歸依の念なきは微塵もなかつた。上の好む所下これより甚だしきは無しとやらで、月蓋長者の振舞ひは、一々國中の見習

ふまゝころこなり、誰れ一人として大林精舎の釋迦如來のもとに詣で、佛法を聽聞しやうこはしなかつたのである。

釋迦牟尼如來長者の心をいこも憐れに思ひ給ひ、彼れ一人を濟度したならば、國中悉く善心に歸するであらうと、茲に方便を以て、先づ舍利弗尊者を遣はし、月蓋を濟度させたけれど應じなかつた。そこで釋迦如來は、再び橋梵波提を遣はしたが、やはり月蓋のために門前拂ひをくわせられた。三度び目に如來は其子羅喉羅尊者を遣はされたが、月蓋は羅喉羅の來たのを見るや、世が世ならば、釋迦如來は淨飯大王の子で悉達太子、羅喉羅は太子の子であるからして大王のためには孫に當る身であるのに、我れを迎ひのために態々訪づれたのは、餘りといへば勿體なしと、急ぎ供養をしやうとしたけれ

ど、忽ち貪慾の心が起き、羅喉羅尊者をも門前から追ひ拂つたのである。ここに於て釋迦如來は、みづから赴いて教化する外はないと、弟子達を多く引連れ、月蓋の門に至り長者の名を呼び給ふたところ、さしもの月蓋も如來の來臨にいたく驚き、衆生結縁の御慈悲に感得し、瑠璃の鉢に純白の飯食を盛つて長者自身に御供養申さうとまでしたにも拘らず、今御供養申さば、今後も度々來らるゝであらうと貪慾に心くらみ、折角盛つた飯食を持つたまゝ、邸内深く逃げ隠れてしまつたので、釋迦如來は今これまでなりと大林精舎へ歸られたのである。

然るに其後毘舍離國には、訖拏迦羅といふ惡鬼現はれ、人の精氣を吸つたが、一度び此惡鬼に祟られた者は、耳、鼻から血を流して死を待つ外なく、

惡鬼の跳梁跋扈は日に増し甚だしく、妻は所夫に別れ、子は親に別れ、號泣する聲山野に滿ちた。月蓋長者の一族も亦大に恐れを抱き、家の子郎黨等をして邸内の四方を警固せしめ、惡鬼の侵入を防がしめたけれど、警固の者からして先づ惡鬼に襲はれ、枕を列べて床に臥す有様に、長者夫婦は愈々恐れ戦く折柄、飛行自在の惡鬼等は何所から闖入したのか、翠帳紅閨の奥深き如是姫の身の上に祟りをしたのである。

姫の如是は今年十三歳の蕾の花、洩れ出づる月のおもかけ、さしも顔容美しくしかりし姿も、あわれや惡鬼の毒氣にふれては、眼から膿を流し、鼻口等からは黒き血を吐き、見るも無慘の有様に、父の長者は身も世もあられず、取り敢えず王舍城に使を走らせ、耆婆大臣を迎へ治療を求め、様々に手を盡

すまはいへ、更に其効ある可くもなく、最早頼み少なくなつてしまつた。
 其時一族の長者中の或る者、月蓋に對し膝を進め、斯く醫藥も祈禱も其効なきを見て、徒らに手を拵ぎ終焉を待つよりは、最後の手段として大林精舎にまします大聖釋迦牟尼如來を頼み奉つたならばまた別に良い方法がないであらまいと言ふと、月蓋は、我れにも其考へがないではなかつたが、過日如來の我が門を訪つれ給ひし時供養もせずして、何んの面目あつて顔を合せ奉ることが出来やうと答へるに、其長者が、恥は一時、姫のためには此儘で過す譯には行くまいと色々に説き賺したので月蓋漸く無明の闇から覺めたやうな心になり、然らばと自らは車に乗りて白象に曳かせ、他の長者等は馬を隨ひ、大林精舎へは乗り込んだのである。

月蓋長者六十三歳で、初めて釋迦如來の御前に禮拜し、偕て改めて國中惡鬼横行のことから、如是姫の命風前に在ることを陳べて、如來の救ひを願つたところ、如來曰はく、惡鬼の祟りによる病氣は前世よりの業報なれば如何にもなすべからず、されど茲に一つの妙法がある、これより西方に阿彌陀如來、觀世音、大勢至の三尊佛をましまし、常に大慈大悲をもつて一切衆生の苦患と厄難とを救ひ給ふ汝早く西方に向つて禮拜し、專心に三尊を念すれば必ず如是は勿論國中の人々も速かに本復することを得べしと教へ給ふた。月蓋は大きに喜び、且つ勇んで我が邸に歸り、ひたすら名號を唱ふると、忽然として西方淨土の阿彌陀如來は、六十萬億那由他恒河沙由旬の御身を縮め、末世相應の小身を現はし、觀音、勢至の二菩薩と共に、月蓋長者の樓門に來降

せられたのである。これと同時に如來の大光明に照らされて、國中に充滿した悪鬼は通力を失なつて、みな散りくゞに逃げ去り、祇音菩薩が大神呪を説き給ふや、不思議にも九死一生の如是姫を初め、國中の者立所に病氣全快したのであつた。

現前、如來の此功德を見ては、誰れ一人として三尊に禮拜せざるものなく、歡喜の聲天地に響いた。如來は長者の樓門に停まり給ふこと二晝夜にして、西方淨土に歸らせ給ふたが、月蓋は餘りの残り惜しさに、尊容を寫し撮り、永く此世に止めんものと思ひ、再び大林精舎に出かけて釋迦如來に其旨を願つたのである。釋迦如來は月蓋の願意を聞き、けにも尤もなりと、通力第一と聞えたる目蓮尊者をし、閻浮檀金を求めに龍宮城に至らしめ、大龍王に

調して求めさせ、月蓋長者に與へられたが、月蓋は之れを玉の鉢に盛つて置く釋迦如來の地上に立ち給へるのに對し、三尊佛は空中に現はれ、双方から光明を放つて見るや、其金は忽ち融け、自然に一光三尊の佛像と化現したのであつた。

(記者、曰く此三尊佛こそ後世善光寺の秘佛本尊となるのであるが、すべて大古の事は茫漠として正史も能くこれを記すことを得ないのでから、以上の物語も我國に於ける神武天皇以前の神話と同一視す可きであらうと思ふ、以下欽明天皇の御代に佛像百濟から渡來し、大臣守屋等の迫害を受け難波の池に投ぜられ、それより本田善光の奉ずるところとなつて善光寺の草創に至るまでは、今より千三百餘年前の事であつて見れば、確とした記録も傳はらず、只八百餘年前の著述にかゝる、扶桑略記に載せられた善光寺緣起に據る外手段はないのである、讀者幸ひに諒とせられんことを望む次第である)

一光三尊佛の化現を見た、月蓋長者の喜びは一方ならず、難有涙にむせびながら後園に寺を建て、靈像を安置し信心恭敬を忘るゝ暇とてはなかつた。さうして長者は常に我れ生々世々此世界に生れ變り如來に仕へ奉らうと誓つたさうである。

月蓋の歿後、一千四百年の星霜を経てから、一光三尊佛は虚空を舐み、百濟國に移り給ふた。時の百濟王は夢に一光三尊佛空中に現はれて、我れ天竺にあつて衆生を濟度すること尙し、今や此國に化を移さんと欲す、汝宜しく護持す可しと告げ給ふと見て、夢覺め遙か天空を仰ぎ見ると、如來現に住立し光明を照らして居られるので深く信心を起し、僧をして奉事供養させたのであつた。それから更に百餘年を過ぎ、聖明王になつて、三尊佛の曰はく、

東方日本國は我が有緣の地なり、速かに我が像を渡す可しこの託宣があつた所から、船を繕し、佛像を寶龕にて覆ひ、佛具なさを供へたりして、經論と共に、西部姫氏、達率怒悞、斯致契等を使とし、日本國に渡し奉つたのである。

頃是人皇三十代欽明天皇即位十三年十月十三日、三尊佛を載せた船は恙もなく難波の浦に着いた。時の朝廷は大和國磯城の上郡金刺宮と稱したのである。欽明天皇厚く御信仰遊ばしたが、物部尾與中臣鎌子の兩大臣は、我が國は神國なれば異國の佛像を拜すべからずと、佛敎の信奉に反對したため、天皇は佛像を大臣蘇我稻目に賜はつた稻目は大和國高市郡小墾田といふ所に在る自分の家を假の佛殿と名して如來を奉じ、それから再び向原の家を清め

て寺をなし、如來を遷座した。これが日本に於ける寺の初めて、俗に向原寺と稱されたのである。

然るに其後、天下に悪疫が非常に流行し、死する者が數限りもなくあつた。大臣尾輿等は此機會大に乘じ可しとなし、中臣の鎌子に謀つて参内し、欽明天皇に奏上するやうは、臣等御に思ふに、今度百濟の國から献上した佛像を、蘇我の稻目等が信仰するのを、日本の大小神祇が憤り給ひ、斯る災厄を起すのであるらしいから、急ぎ彼の寺を焼き盡してしまつたなら、やがて神の怒りも鎮まる事だらうとお勧め申したので天皇の御心も動くやうになつた。是に於てか尾輿、鎌子等は多勢の軍卒を引連れ、向原の寺に赴き、四方から火をかけて焼き拂つたけれど、一光三尊佛のみは猛火の中に在りながら妙しも

尊容を損じ給はず、闇浮檀金の膚からは光明を赫奕と放つてを見て、尾輿等は口惜しく思ひ、佛像を難波の池へ沈めたのであるが、之より種々の不思議あり、尾輿等は佛罰を蒙つて暴死した。

天皇は此事を聞きしめし給ひ、御後悔遊ばされて、直に勅使を立て一光三尊の靈佛を迎へしめ、大臣蘇我の稻目に詔りあつて、高市郡向原の寺に再び安置せしめ給ひ、又百濟の國から道深法師外六人の僧をめし、如來の供養をさせたのであつた。

斯くして敏達天皇の十三年まで、三十二年の間一座無移不動にして、三尊佛は向原の寺にあつたのを、稻目の子馬子、豊浦の郷に善盡し美を盡したる伽藍を建て、如來を遷座した。これ日本に於ける七堂伽藍の初めて、此寺を

豊浦寺と號したのである。

此時にあたつて尾輿の子守屋は、鎌子の子勝海ミ心を合せ、敏達天皇の御不例を奇貨とし、これ蘇我の馬子が佛像を奉ずるがためであると、奏問したので、天皇の御心も動き、佛法禁制の宣旨が天下に出づるに至つた。一方の守屋、勝海等は軍卒を狩り催し、豊浦寺に押し寄せ、忽ちにして金堂、講堂、回廊、鐘樓までも火を放つて烏有に歸せしめたけれど、三尊佛のみは炎の中にありながら尊容聊かも變らず、儼然たること元の如きものあるに、守屋等は更に怒りを爲し、庭前に大きな輅轡を据えつけ、七日七夜息をもつかすふき立てたが、閻浮檀金の佛像は色だに變らせ給はないのに、今度は多勢の鍛冶屋を召し寄せ、鐵盤の上に載せ鋤をもつて打つと雖も、これ亦少しも損じ

給はぬので、流石の守屋も呆れ果て、アナ恐ろしき佛なりとて、又しても難波の淵に投じたのである。

歲月は過ぎ、推古天皇の御代十三年になつて、信濃國伊奈郡に本多善光といふ者があつた。國司交代の供をして都へ上つたが、其歸りの道すがら難波の堀江を通りかゝると、水の底にあつて善光々々と我が名を呼ぶ者があるので、不思議に思つてふり返るに、忽ち聲の主は善光の背におぶさつたのである。善光は驚きの餘り逃げやうとする時、背から妙なる御聲にて、我れは三尊の彌陀如來なり、汝むかし天竺にて月蓋長者たりし時、釋迦、彌陀二尊の光明をかりて此像を寫せし以來、今に至りて千五百餘年となる、然るに其後我れ此國に來つて衆生を濟度せんと欲し、汝を待つこゝ久しかりき、汝が

故郷信濃國は我が有縁の地なれば我れをつれて下向す可しと、仰せがあつたので、善光の宿善忽ちに開らけ、難有涙にむせびながら朝廷の記録所へ此事を届け出で、勅許を受け、愈々信濃國に遷座されたのであつた。

善光は如來のお供をして、我が家に參着するや、有りし次第を妻の彌生に語り聞かせ、妻もろこも信心に餘念はなかつた。併し善光の家は非常に貧しかつたので、如來を奉すべき所もないため、己むを得ず春白の上に載せ、西の庇の下に安置したのである。けれども何日までも埴生の小屋に置き奉る可きにあらずと、善光は村の者を語らひ、其後一小堂宇を造つて、如來を遷したが、翌朝になつて如來は再び元の善光の家に歸られたので、何故かと訝かしたのだが、其夜の夢に三尊佛告けたまはく、念佛の聞えざる所には棲むも懶

うし不淨の小屋なりとも我が名を唱ふる者あらば、聲を尋ねて來る可しと仰せられたので、善光は勿論村中の人々愈々信心をましたといふ。

善光又或る時、油の料に事を缺き、燈明を點さなかつたのを、如來も不憫と思しめしてや、三尊佛の御身から光明を放ち、家の中を照らされた。善光は此光明永く常燈明にうつることを得るならば、數多の人々が如來の御利益を蒙るであらうと申すと、如來の光明は直に燈明に移つたさうである。此常燈明こそ、千餘年の今日まで善光寺の内陣に輝いて居るのが、即ちそれであるを傳へられて居る。

三尊佛伊奈郡に在る事四十一年、皇極天皇の元年佛の託宣を受けて善光、如來を水内郡芋井郷(現在の長野)へ遷座したが、皇極天皇佛法信仰の御心厚

く、善光及其子善佐を禁裡に召し出し給ひ、一光三尊佛のために伽藍建立の勅詔を賜はり、合せて甲斐、信濃の兩國に命じ、御造營の支度を整へさせられたのである。善光、善佐の二人は初め我が家を出る時は、見るかきもな
い姿であつたけれど、伽藍建立の修理職になつてからは、錦の袖を列ねて本
國信濃に歸つたが幾干もなくして芋井郷に、巍然たる大伽藍が成就するに至
つた。寺號は言ふまでもなく善光の名を取つて、善光寺の勅額を賜り、これよ
り一光三尊の利生、一天四海に輝き亘ることになつてのである。

當初善光寺には、一戸帳みてなく、如來の御影も現はに拜し得たが、孝徳
天皇の白鳳三年に寶龜を造り、錦帳を垂れ後世永く秘佛として讃仰するに至
つたのである。

善光寺の盛衰

神社や佛閣と雖も時に盛衰を免れぬのであるが、善光寺も亦草創以後千餘
年間に、若干の消長を餘儀なくされざるを得なかつたのである。即ち孝徳天
皇の御代に金堂造營成り、爾來約九百年間は遷座の事なかりしも、永録年間
には上杉謙信の部將宇佐美定行が、一時上水内郡野尻に奪ひ、其後武田信玄
が小縣郡根津村に移しまるらせ更に永録七年に甲斐國甲府に新善光寺を建立
し、一光三尊佛は勿論一山の僧侶までも引移らせた。天正十年武田勝頼天目
山に討死を遂ぐるや、織田信長は本尊を岐阜に奉じ、同年六月信長京都本能
寺に於て、明智光秀のために弑せらるゝに及んで、信長の一子信雄は更に尾

張國甚目寺に移した。其後徳川家康の手によつて、遠江國濱松の鴨居寺に安置せられ、天正十一年に至り再び甲斐の新善光寺に歸し、慶長二年六月には豊臣秀吉京都大佛殿へ移したが、善光寺僧侶の運動により、慶長三年恰も四十年目で、水内郡の舊地へ還座となつたのである。此遷座中に善光寺として最も大打撃を受けたのは、武田信玄が一山を擧げて甲府に移した時であつて、數澤山の寶物の類は、悉く新善光寺の所有となつてしまつた事である。現在長野市の善光寺には前立本尊、釋迦涅槃像等の外、國寶たる可き物が無いのは即ち此故である。

現今佛敎益々旺盛、善光寺を中心として長野市繁榮の有様は、年々汽車の便をかりて善光寺に參詣する者、約一百万を下らざるに見て明らかであるが、

過去にあつても、鎌倉時代と徳川時代には、幕府の歸依淺からざる關係で如來の威光もいや増しに輝いたのであつた。

鎌倉時代の全盛については、幕府の記録たる例の吾妻鑑が能くこれを證明して居る。今其二三を摘記しやうなれば、右大將源頼朝は治承三年三月中旬善光寺が炎上したまゝになつて居たのを歎き、文治三年に再建の命を下し、四年目の建久二年十月までに落成せしめたのである。此時の善光寺の規模は極めて廣大にして、七堂伽藍悉く揃ひ、且つ輪奐の美言語に絶したといふ。岩井堂に於ける觀音の古跡などは、恐らく其名残りであつたかも知れない。斯くして頼朝は淺間山の卷狩をした時、前後二度も善光寺に參詣した關係をもつて、善光寺附近には頼朝に關する古跡が多い。降つて北條氏の世になり

二族の尊信殊に深く、延應元年六月には泰時から、小縣郡小泉庄室賀郷の内
 で、念佛衆十二人に田地六町六反歩を永代に寄進した。其の時の寄進状には
 「年來御歸依の上、殊に彌陀の引攝を恃まるゝ也」の文言を認められてあつ
 た。又最明寺入道時頼からは、弘長三年三月十七日附を以て、深田郷（現今
 の長野市深田町）の内水田六町歩を寄進されてあるのである。前記念佛衆十
 二人さあるのは、十二寺院河原に在つた十二ヶ寺を言つたのであらう。

右大將頼朝の善光寺參詣を初めとして、鎌倉幕府時代には、歴史に名を垂
 るゝ著名の人が續々參詣して居るのであるが、殊に茲に特筆大書に値ひする
 一事實がある。それは正應六年、即ち今より（大正九年）六百二十八年前に
 藤澤遊行寺二世他阿上人が、多數の弟子を伴ひ、時宗弘通の道すがら善光寺

に參詣し、實際上人は弟子の宗俊と稱する、繪を能くする者をして、善光寺
 のスケッチをなさしめた一事である。此スケッチは「一遍上人繪詞傳」と名
 づけ、上人歸山の後、京都の畫家粟田口隆光に書き直させて遊行寺に保存し
 て置いたが、別に狩野家の弟子の手にて、原本を模寫したものを、後世徳川
 幕府の淺草文庫に、これ亦保存して置かれたのであつた。然るに遊行寺保存
 の原本は、同寺火災の節焼失してしまつたけれど、幸ひに淺草文庫保存の模
 寫物は、其後に到り帝室博物館に保管を托されて、今尙現存して居るのであ
 る。此博物館保管のものに對しても實は最近（大正八年）まで何人も善光寺
 に關係のある「一遍上人繪詞傳」なることを知らずに居つたのを、長野市に
 て市史編纂の議あつて、編纂を秋野太郎氏に一任し、秋野氏偶々他に所用あ

り、東京 帝室博物館に監査官野村重治氏を訪ふた所、談計らず善光寺の事に及び、同館に件の繪詞傳あることを發見し、喜悅して之れを寫眞に撮り、長野市に持歸り、乾板は市役所に永久保管されることとなつたのであつて、此秋野氏の功勞は没す可からざるものであらうと思はれる。

そこで其繪詞傳によつて、鎌倉時代に於ける善光寺の規模を察するに、金堂の向拜の破風が、現今のものと同趣を異にする所あるだけで、他に餘り變りはないらしいが、下堀と上堀との橋（今は無し）を渡ると、今の大門町旅舎五明館あたりの邊に仁王門があつて、仁王門もあり、金燈籠を経て、金堂に到る間に舞臺が設けられ、五重塔は今の大本願の北部あたりに聳へて居つたやうに思はれる。畫中他阿上人は其舞臺の上に起つて加來を供養して居

るが、スケッチ僧宗俊の滑稽なる、金堂の附近に五體不具の一寸法師の立てるを、參詣人の一人が窃かに後に廻り、手にもてる扇子で身の長を量つて居る所を、巧みに描き出したのは、時に取つての愛嬌で、今尙繪詞傳を見る時は、六百餘年前の善光寺を髣髴せしむるものがある。

又鎌倉時代に於ては、善光寺如來の御影を模寫することが流行した。これは如何に善光寺の全盛の物語るかを證明するのであつて一例を擧ぐれば、建久五年に尾張國熱田の僧定尊は三尊佛の正照を造らうとして、其許を得やうとしたが、一山衆議これを拒絶したにも拘らず、同六年四月廿一日と廿七日の兩夜、寺僧圓俊、如薩の二人夢に佛告を聞き、其請ひを許した。承久三年には伊豆國の淨蓮房源延、自から眞容を寫し、越前法橋に鑄造させた。親鸞

聖人も元仁元年に分身佛を得られ、下野國に専修阿彌陀寺を建立す。これが淨土眞宗高田派本山の舊蹟である。京都の善光寺は元仁元年に建立されたのだが、定家卿の明月記に「近日京中の道俗騷動禮拜し、又日に善光寺を寫し奉る」ともある。

鎌倉幕府の末葉に當る正和二年に、又しても善光寺は炎上したが次いで再建に際し、虎關禪師の書いた「善光寺飛柱記」には面白い逸話が載せてある。正和三年三月のこと、普請にあたり諸方から材木の運搬中、信濃埴科郡倉科縣に大木があるのを、縣主が献納したけれど、何分にも大木であるので動かないで困つて居た。或る日突然此大木が空中に舞ひ上り、繩を縋のやうに引きつゝ善光寺の普請場へ飛んださうである。更級郡の埴捨にも同様

なこごがあつた。此事は當時京都邊でも大變評判になつたといふ。

三國一の靈場

室町時代の善光寺門前町は、立派な市街を形成し、戸數も二千戸以上はあつたらしい。大塔物語といふ書物によると、應永の頃は、現今の櫻枝町（昔は櫻小路）附近は遊女町であつたやうだ。同年間に信濃の國司として小笠原長秀が下向し、善光寺の或る寺に入った。然るに長秀の政治が悪かつたため、大塔と稱する所（今何れの邊なるやを知らず）に一揆が起つて、盛んに長秀の軍を苦しめた。最後に長秀は軍議を凝らし、潔よく一揆と勝負を決しやうとしたが、大塔一揆は非常に強く、長秀の軍は兵糧攻めに遇ひ、數十日の後

には餓死する者數を知れず、勇士は残らず味方同志刺しちがへて戦死を遂げてしまつたので、長秀は這々の體で都に逃げ歸つた。此戰爭中に鹽崎などいふ地名が出て居る所を見ると、大塔の更級郡であることは想像に難くないと思はれる。戦死の勇士中に坂西次郎有國といふ者があつたが、小笠原長秀に随伴し信濃に入國して以來、櫻小路の遊女玉菊と馴染を重ねたが、戦さの門出に馬に乗つた雄々しい有國の後を、裾花川のほとりに追いつき、別れを惜しんでから、大塔で戦死の報を聞くや、態々戰場に出かけて有國の遺骨を尋ね、後に剃髮して厚く有國の菩提を弔らつたさうである。是等の行ひもつまりは、千手の前が重衡のために善光寺に詣つたことや、虎御前が曾我十郎のために菩提を弔らつたのを、見やう見擬た 善光寺如來の感化であつたであらう。

らう。

大塔物語には、尙善光寺町の繁昌する有様を、左の如くに記してある。

凡て善光寺は三國一の靈場、生身彌陀の淨土にして、日本國の津梁也、門前市を爲し堂上花の如き道俗、男女、貴賤、上下、思ひく心々の風流枚舉に遑あらず（中略）若殿原は例の日結び十徳、室町笠に引籠り、口覆ひの爲體あり、或は稚兒若僧、中童子、戸隠山の山伏がぞみ行く風情あり、或は傾城白拍子、夜發のこともがら、紅紫の色を纏ひ、蘭麝の香りに染み、此所、彼所に留連して鏡ふ所あり。（以下略）

善光寺の建築

徳川時代になつてからは天下も統一され、街道に一里塚を立て旅人の便を圖つた位だから、善光寺に參詣する者は、いや増しに殖えるばかり、如來の

佛徳はいよく四海に洽きものがあつた。別しては徳川幕府の歸依淺からぬ事として、慶長六年には千石の御朱印地となり、何等拘束を受けない獨立自治の寺院はなつたのである。現在の善光寺金堂は、元祿十四年江戸表まで奉加を初めたのだが、寶永六年に至るまでの間に於て、前立本尊を奉じ回國巡歴、大に淨財を天下に募つたものだ。金堂重建の材用悉く整ふや、徳川幕府は特に眞田伊豆守信房に命じ、土木を董督せしめたのであつた。顧みれば善光寺は、草創以來前後十一回も回祿の災にかゝつて居る。即ちこれを表に現す左のやうになる。

第一回 大同四年五月廿三日 第二回 天延三年月日不詳
 第三回 天仁元年二月三日 第四回 治承三年三月廿四日
 第五回 文永五年三月十四日 第六回 正和二年三月廿四日

第七回 文明六年六月四日 第十回 寶永十九年五月九日
 第十一回 元祿十三年七月廿一日

現在の善光寺は、此元祿十三年の炎上後に建立されたので、舊時の壯觀に復するを得た。其構造の太要は、南向撞木造り二重屋根高さ十丈二尺八寸、間口十七間餘、梁間十九間四尺餘、向拜の出端三間一尺餘、奥行二十九間二尺餘、桁行三十二間四尺餘、向拜出端六間二尺餘、丸柱數百三十本、檼の數八千八百十二本、建築宏壯、構造精巧にして、文明の進歩せる今日を以てしても、尙且つ専門技術家の驚嘆する所で、近年内務省の特別保護建造物となつた。

其當時の記録によれば、木挽七萬三千六百二十工、手傳ひ一萬二千百工、

大工十六萬三千六百二十六工、手傳ひ二萬四十工、此工賃一萬二千九百七十
四兩二匁六分三記されてある。

爾來善光寺は、弘化四年の大地震にも少しの被害もなかつたが、明治二十
四年に市内から火事を出した際、仁王門のみを焼失したのであつた。有名な
弘化の善光寺大地震には、一山の僧徒、如來を奉じて箱清水に避難したが、
秘佛は依然たる秘佛で寶龕に納まり、數日間を地の震ふ中に過され、遷座の
行列を拜した者をして、思はず天地の亡ぶる前兆にもやゝ疑はしめた位だ
いふから痛々しさの有様を今尙憶はせて餘りあるではないか。如來は七日目
で金堂に遷座せられた。明治二十四年に焼失した仁王門は、大正七年三月に
至り漸く竣工したのである。高さ四丈五尺、桁行四丈三尺、梁間二丈五尺、

全部棟造りで、伏見宮貞愛親王御親筆「定額山」を題する扁額を掲げられ、
又仁王尊外一軀の佛像は、帝室技藝員高村光雲、米原雲海の合作になつたも
のだ。

寺内の手引

參詣人の手引のため、金堂内の案内をしやうならば。向つて正面を御拜と
稱し、階段を上り一步入りし所を妻戸と言ひ、其奥を外陣又は彌勒の間とも
言ひ、疊が敷かり通夜に便する所を中陣、更に僧徒の勤行する清淨の場所を
内陣と稱するのである。堂内で著名なものを記すならば。

親鸞聖人手植の松

は聖人善光寺に百日間參籠ありし時、朝日山

から取り來つて如來の寶前に供へたもので、今に其名残を止めて居る。
賓頭盧尊者 昔から流行病に對して功顯あらたかだといふので善男善女盛んで其像に觸るゝため、今は磨滅して辛うじて尊容を拜し得るに止まる。

瑠璃壇 内陣の一段奥の内々陣にあるのがそれである。一段高い所には一光三尊佛を安置し、七重の戸帳をもつて包まる。常燈明は如來善光のため尊像から放たれた光明で、千餘年の今も尙光りを斷たぬと傳へられて居る。

三卿の像 三卿といふのは、善光寺の開基本多善光と妻の彌生其の子善佐の三人を總稱しての名であるか、此像は善光寺の中央に安置されてあ

る。如來は昔善光の家に在らせられた時と同じく依然として西庇に安置してある。

守屋柱 物部守屋の怨魂が如來に祟りを爲し、柱の一角を捻つたのだと言ひ傳へられて居る。

戒壇巡り 如來の瑠璃壇を巡ぐる暗き場所を言ふのであつて、昔から信心薄き者は畜生に化すなどいふ異説がある。

由來善光寺には定まれる宗旨なく、八宗兼學と稱せられて居るのだが、別當大勸進以下衆徒二十ヶ寺、妻戸五坊は其宗旨天台宗に屬するを以て天台の教儀に據り、又寺務職大本願以下中衆十四坊は淨土宗であるので、淨土宗の教儀に規つて朝夕勸勤を怠らぬのであるされば八宗兼學の故を以て古來宗旨

の如何を問はず、名僧知識が澤山に参詣された事實が残つて居る。

東 光明通照門定額山善光寺

西 念佛衆生門不捨山淨土寺

南 十方世界門南命山無量壽寺

北 攝取不捨門北空山雲上寺

右は四門四號と稱し、善光寺の別名である。

現在の山門は寛延三年の建造にかゝり、高さ六丈六尺七寸、桁行十一間一尺餘、梁間四間二尺四寸の二層樓で、上樓には文殊菩薩及四天王の木像を安置し、又正面には享和年間歡喜心院宮の御染筆に成る扁額を掲げられて居る。毎年一月十五、十六の賽日、八月十四、十五、十六の三日間、春秋彼岸の初中終の三日には、特に善男善女のため樓上を開放する慣例である。

仁王門の重建については上記した通りであるが、明治二十四年まで嚴存し

たものは、文久四年に工を起し、慶應元年七月竣工したのであつて、比較的
新らしかつた。仁王尊は秋山春朝の作であつたといふ。

鐘樓は嘉永六年に建てられたもので、洪鐘は寛永九年十月高橋白蓮の本願
によつて、伊藤彌兵衛金次の鑄造にかゝつたが、其後破損したから、寛文七
年に改めて伊藤又兵衛金正に造らしめた。

經藏は高さ四丈六尺、間口奥行とも各六間二尺、一切經全部を藏してある
が、山門の開放と同じ日に矢張り開放される慣例である。寶曆九年に建造さ
れたもの。

寺務所大本願の前(御高札前ともいふ)から、金堂に達する敷石の長さは
約四町、幅三間餘に亘る。此敷石の寄進は伊勢國白子の人太竹某とふい者

獨力で行つたので、石の數七千七百七十枚ある。これには頗る面白い因縁話
が附隨して居る。

今は昔、伊勢國白子の里に大竹屋とて双びなき豪商があつた、夫婦の仲に一人の
息子があつたが、息子は親の辛苦して貯へた金の冥利も知らず、いつか遊里の味
を覚え、一夜として家に寝たことがなかつた、子に甘い母親は息子の歸らぬ夜は
オチ／＼として圓かな夢を結ふこともならず、千々に心を碎くばかりであつたが
或る夜息子は遊里よりの歸るさ、店の戸じまり固くして家に入る由もなかつた
め、かねて案内知つた裏庭へ廻り、暗にまぎれて高擧を乗り越え、漸くにして地上
へ飛び下りたが、其物音に目を覺ました父親は、必定盜賊御參なれと、あり合ふ
鉢をもつて密かに盜賊の後に忍び寄り、唯一打ちとふり上ぐれば、アット一聲此

世の名残り、空しきむくろを横たへたのである、此聲を聞きつけた家人は、手に
／＼手燭を灯して駈來り燈に照して賊の顔を見れば、コハソモ如何に賊と思つた
は天にも地にも代え難い我がいと子であつたので、少時は呆れて言葉もなかつ
た、両親は何んの因果で斯くも淺ましい憂き目を見せたことかと、思へば思ふほ
ご、身も世もあらなくに、やう／＼にして野邊の送りをすませ後の回向を申らふた
めと、又一つには夫婦が過去の罪障消滅の爲めとを兼ねて、他人に富み榮えた家
を譲り渡し、回國巡禮に出かけたが、三國一の靈場と聞いて善光寺へも參詣し。
乃ち其時後世安穩を願はんぞ欲し。參拜者への功德のため寄進したのが此數石で
ある。

大勸進と大本願

善光寺の組織は大小寺院、總べて四十六ヶ寺より成るのである。而してこれを統率するものが別當職、大勸進と、寺務職、大本願の二寺であるので、世間ではこれを兩寺と稱へて居る。大勸進は天台宗に屬し、大本願は淨土宗に屬し、善光寺は實に二宗兩立の狀にあるのだ。一山の僧徒も亦兩寺に分れ隨ひ、衆徒二十ヶ寺、妻戸五坊といふが大勸進に隸屬し、中衆十四坊は大本願に隸屬し、兩派互に宗旨を天台、淨土の二宗に分つて居る。

衆徒並に中衆の中には老僧三人、奉行五人あるが、老僧は衆徒及中衆の上席で内一人づゝ毎朝昇堂し、内陣の壇上で法華經又は淨土三部經を讀誦する(淨土宗老僧は三部經)奉行は老僧を輔佐し瑠璃壇の香花、燈明の洒掃等を司り、如來寶龕を開閉したり、或は堂内一切を監督して居る。衆徒は元來

二十ヶ寺あつただけれど、寶勝院が斷絶し現在二十ヶ寺になつた。

院坊は何れも内佛を有し、本尊を安置し奉仕して居る。

- | | | |
|-----------|-------------|------------|
| 藥王院(藥王菩薩) | 吉祥院(弘法大師) | 福生院(阿彌陀如來) |
| 光明院(虚空藏尊) | 蓮華院(辨才天) | 常徳院(不動明王) |
| 教授院(不動明王) | 最勝院(藥師如來) | 常智院(大日如來) |
| 徳壽院(文殊菩薩) | 尊勝院(當麻曼荼羅) | 本覺院(善光寺如來) |
| 玉照院(觀世音) | 世尊院(涅槃釋迦如來) | 常住院(大日如來) |
| 威徳院(普賢菩薩) | 良性院(準規觀世音) | 圓乘院(五智如來) |
| 寶林院(地藏尊) | 長養院(觀世音) | |

中衆は昔は三論宗であつたが、法然上人善光寺に滯錫中、大本願と共に淨土宗に改宗し、直弟となつた。年番にて堂童子を勤め、善光寺如來を年越しの式から、御印文の授與等の役を司る。寺数は十五坊あつたのが、行蓮坊

が廢寺となり、今は十四坊になつた。

- 堂照坊(庚申尊) 正智坊(阿彌陀如來) 白蓮坊(八福大師)
- 淨願坊(聖德太子) 兄部坊(地藏尊) 常圓坊(阿彌陀如來)
- 堂明坊(辨才天) 向佛坊(善導大師) 鏡善坊(閻魔大王)
- 野村坊(阿彌陀如來) 淵之坊(善光寺緣起堂) 德行坊(綱引阿彌陀)
- 隨行坊(阿彌陀如來) 正信坊(圓光大師)

妻戸は往昔時宗であつたが、今日では天台宗になつて居る。

- 甚妙坊(地藏尊) 壽量坊(不動明王) 常行坊(阿彌陀如來)
- 玄澄坊(阿彌陀如來) 善行坊(阿彌陀如來)

若し夫れ兩寺たる別當職 大勸進、並に寺務職大本願の緣起に至つては、善光寺同様頗る波瀾曲折に富むものがあるけれど、ざつとこれを記して置くことにする。

先づ大勸進から説き起さん、善光寺山門の下西側に蓮池を隔て寶閣巍然たるものがそれで、長橋を渡り正門の壯大なるを見て、自ら寺格門地を知ることが出来るのである。大勸進は實に善光寺天台宗一山の統領で、其昔開基本名善光(若麻績東人)の住居した所にして、大檀越と稱へ、善光より十五世まで相亞ぎ、親戚文部氏これに代り、十一世を経、天慶以後法印代つて別當さなり、秘佛寶龜の鎖鑰を握り、師資相承ぎ、未だ曾て餘人の手に委せずして、以て一山を統率し來つたものだ。随つて累代善光寺別當兼大勸進に補任の宣旨を賜はり、又別當一代一度參内天顔を拜する勅許を蒙つたのである。教化勸財のために前立本尊を奉じて京都へ出た際なごは、特に禁裡に召されて、開帳を許された事さへあつたといふ。住職は東叡山若しくは比叡山から、

碩學高德を迎ふるのを慣例とする。

寺域宏大、東西七十六間、南北六十間、面積四千六百餘坪を有し邸内には萬善堂、内佛殿、行在所、護摩堂、聖天堂、靈牌堂、紫雲閣、第一及第二寶物陳列館、方丈、學寮、僧房、事務所等宏壯なる建物屏立し、且つ明治十六年三月創立にかゝる、大勸進養育院も設けられてある。養育院には、幾多薄命なる老若男女多く收容せられ育成を受け餘生を樂しんで居る。

行在所は明治十二年長くも明治天皇、東北御巡幸の際、行在所に充てさせ給ひ、明治三十五年には今上陛下、未だ東宮に在はしませし時、鶴駕を曲けさせられ、前庭に松樹を御手植遊ばされ給ふた。降つて大正四年五月明治天皇の御寫眞を御下附あり、更に大正六年に至り、淳宮、高松宮兩皇子殿下東

北御見學の節、御旅館に充てさせ給ひ、前庭に稚松二株の御手植があつたのである。大正八年となつては東宮殿下御見學として信濃路に入らせ給ひし時、鶴駕を駐めさせられ松樹御手植あらせらるゝなど、御親子御三代に亘り、屢々御恩命を奉じたるが如きは、全く他に其類例を見ない所で、無上の光榮にして感激して居る、御座所の跡は平素翠簾を掲げ、雲綯縁の青疊と相俟ち、何事のおはしますかと只管辱けなさに、拜觀人をして覺えず肅然襟を正さしむるものがある。前庭にある幾多の牡丹中には珍種乏しからず、門外池塘の紅白薔華と共に、其名遠近に傳はつて居る。曾て島地默雷師に詩があつた。

魏紫姚黃花滿坦 麗葩俯酒夜憑欄
御簾不捲君如在 粲露沈香亭北看

大勸進邸内にある萬善堂は、明治二十年に再建せられた十一間四面檜造りの殿堂で、向拜には久邇宮邦彦王殿下御染筆「萬善堂」と題する金字の額が掲げられ、須彌壇上御厨子の内には、聖徳太子御作沈香木彫の「一光三尊佛」を安置し、脇内陣壇上には開基善光、善佐、彌生の前の木像、及日月牌等を安置してある。二六時中梵唄嚴かに金鈴振ふところ、邪念妄想を断ち、清淨高潔の道場なるを偲ばしむ。

内佛殿内陣の相間には、北白川宮能久親王殿下御染筆の「無量壽殿」と題する金字の額、並に弘法大師筆「善光寺」と題する額がある。壇上には國寶たる前立本尊を、寶篋内に秘封し奉安せられ、又傍らには三個の御靈判を收めたる。寶篋も安置してある。

靈牌堂の本尊は延命地藏菩薩で、傍らに武田信玄、眞田伯爵家、其他善光寺に縁故を有する諸華族、或は殉國忠靈を始め、壇信徒の位牌を安置し、毎朝遍く各靈の後世を弔らひ、懇ろに追善回向あらるゝ道場である。

護摩堂の本尊は智證大師作不動明王、並に兩脇侍の木像にして、開運大黒天も安置されて居る。外陣には戦勝記念のため元帥伯爵東郷平八郎氏の揮毫になる金字の額掲げらる。護摩祈禱を爲し、御圖を授けなきて居る。

紫雲閣は百二十疊敷の大廣間、外敷室を有し、時々或は講演會を開いたり、參拜講中の會場、來訪者の宿泊にも充てらるゝ宏壯な建物である。

寶物館は第一號館、第二號館に分たれ、御宸翰、又は諸親王の御染筆を初め傳來の珍品に富み、中には國寶に擬せられて居るやうな古畫の類も澤山に

あり、常に觀覽を許されて居る。

別當職大勸進と並立するものに、寺務職大本願と號する淨土宗の別格寺が在る。仁王門西南の一帶、宏壯なる筋堀の一廓、不斷法雲の棚引渡り、念佛の聲絶えざるものがそれである。地域東西四十一間、南北六十二間、總面積四千餘坪に及ぶ。往古は三輪宗であつたけれど、正治元年に淨土宗に改められた。大本願は皇極天皇の御本願により、善光寺の伽藍御造營遊ばされし際、御杖代として蘇我馬子の女を剃髮せしめ、尊光と稱し、都から下向し、如來恭禮の寺務を掌理させられしもので、特に大本願の勅號を賜はつたのだといふ。爾來歴世の上人皆尼公にして、代々御繪旨の表、善光寺何々(法名)上人となし賜り、繼目御禮のため朝廷に参内し、天顏を拜し奉ることを得る、所

謂日本三上人の一となつたのである。

大本願中興の上人として聞えたるは、皇族の出にして久我誓圓尼公と稱せられた方であつたが、帝都より皇族方の善光寺に御參詣あらせらるゝや、必ず大本願に時の住職上人を、訪問あらせらるゝ慣例となつて居るに見ても、如何に皇族の御親任厚く、且つ寺格の高きかを知るに足らう。大本願は明治二十四年六月二日、善光寺の二王門と共に不幸焼失したけれど、數年を出でずして、現今の結構壯麗なる殿堂が、重建せらるゝに至つたのである。

寺内には本誓殿、光明閣、奥書院、表書院、寶物陳列館、上人御居間、明照殿等の建物がある。

本誓殿には惠心僧都作、一光三尊阿彌陀如來を安置し、久邇宮朝彦王殿下

御染筆「本誓殿」と題する金文字の額、又小松宮彰仁親王殿下御染筆「大本願」に題した額が掲げられ、朱塗の壇上には小松宮彰仁親王殿下の御位牌、善光寺開山善光、善佐、彌生の前等の木像が安置されてある。

光明閣は本誓殿の裏手に在り、優美壯麗なる殿堂で、信徒に禮拜を許されてある。

奥書院は特別信徒に對し、上人が對面せらるゝ所であつて、四面には翠簾をかけ巡らし、床には花鳥の珍幅、兩側には金屏風を立て思はず恭敬の念を起さしむ。

表書院は大立關の西方、廊下を隔てゝあるが、これ亦壯麗を極めて居る。

寶物陳列館には、珍寶什器が陳列されて居るが、就中光格天皇御所持の末

廣、聖護院盈仁親王御遺愛の筆筭、伏見宮邦家親王殿下、山階宮光仁親王殿下などの、御染筆の類を悉く秘藏されてあり、信徒には隨時觀覽を許されて居る。

上人御居間は奥書院の後方に在る、結構瀟洒なる一室がそれであつて、美しくしき法衣を召されたる御姿は、此一室中に認むるを得べく、爽やかなる讀經の聲は、こゝよりぞ漏れ來るのである。上人日常の動作は、毎日三度び善光寺本堂に參觀せらるゝ傍ら、一般信徒のため時々本誓殿に於て供養あり、餘暇ある時は敷島の道に親しまれ、折々特別信徒に對しては、水莖の跡麗はうき色紙類を與へられるこいふ。

明照殿は布教傳道用の目的で建築され、結構殊に壯麗、人目を驚かしむる

ものがある、明照婦人會を開催し、又時に精神講話會なども開くことがある。上人が明照殿の一隅に寂やかに座られ、靜かに講話を聞かせらるゝ例は、珍らしくないさうだ。

山内名所舊跡

記者は、善光寺及兩寺一山の來由をあらまし記したから、いでやこれより進んで、名所舊跡、又それと關係ある奇しき因縁ある物語を記すること、しやう。

地震塚

金堂より東南の方にあたつて、石で築かれた大きな塔がそれである。弘化四年三月十四日、時は恰も善光寺に於る七年一回の、如來開籠の

時に當つて居たのであつたが、今で言へば夜の十時頃、突然地大に震ひ、善光寺町の者は言ふまでもなく、遠國から來て旅館に宿泊して居た、善男善女、貴賤老若、悉く此災害にかゝり慘狀實に目も當てられなかつた。然るに折悪しく地の震つて家屋を覆へしたゞけに止まらず、間もなく大門町の或る旅館から火を出したと見るや、善光寺町は一面の猛火に包まれ、人畜の逃げ場を失なひ泣き叫ぶ聲は天に沖し、阿鼻叫喚、焦熱地獄も斯くやと思はしめたといふ。近年まで生きて居た人の話によるに、實際地震で横死をした者よりは、寧ろ此失火のために、焼死した者の方が多かつたといふ事であつた。地震は前後二十餘日間に亘り、間斷なく罹災者を驚かしたが、難を避けた者は素より生命カラムであつたので、着るに衣類なく、食ふに食物なしの有様で、

田圃の中に假小屋を造り辛うじて寢食を取り居る所へ、雨なき降り其悲惨なる状態、更に甚だしいものがあつたとやら。罹災者の中には假小屋を造り、避難しながら町を眺めると、自分の家はまだ満足に建つて居るのが見えるが、炎々として燃えつゝある火事のために、火の柱は倒れる、屋根の瓦は落ちる、其物凄いや目をあたりに見たり聞いたりしたのは、家に戻つて入用な物を取り出して来る氣にもなれず、躊躇する間に、到頭家には火がかゝり、無惨にも焼失するのを眺めて泣いたといふ慘話もある。善光寺町を遠ざかる四五里先の岩倉山が、地震で崩壊し、土壤が押し出し、岸川が二十一日間堰止められたのも此時の椿事であつた。斯くして横死したる者の數幾千人なるを知らず、遠國參詣者の遺骨は、所も知られず名も知れぬので、一纏めにして

葬られたのを、信濃國小縣郡上田町の土屋仁助なる人の發願によつて、建立されたのが此地震塚であるのである。當時横死者の遺骨は積んで山を爲し、高さ四尺、東西三間、南北二間三尺もあつたとは、聞くだに身の毛の慄立つ物語ではあるまいか。

千人塚 これにも亦憐れな話がつきまとふのである。善光寺を隔る約三里、東南の地點に海津城といふのがある。天正十年頃には織田信長の臣、森長可が住居したのであつた。然るに同年六月、信長中國の毛利輝元を征伐するため、旗下小數の兵を率ゐて京都の本能寺に入つたが、逆臣明智光秀に攻められ、脆くも討死したのを注進によつて知つた森長可は、主家の一大事と取るものも取り敢えず手勢引具し海津城を發し、上國の途につかんとするの

を、長可が領分の土豪等は、長可が自分の出した人質をも返さずに、急遽都に攻め上るのを見ては黙し居られず、俄かに反旗を翻へし、春日周防なる者一揆の首長となり、数千の人数をもつて馬場峠に追討し、長可が上國の舉に對し、大に防害を加へたのである。其後天下平定するに及び、森長可の子に當る右近太夫忠政、徳川將軍に乞ふて海津城主となり、慶長七年中貫文税法を廢して、檢地を爲し、田畑屋敷の税法を改めて石高税法とし、苛斂誅求至らざるなかつた。茲に於てか百姓等は其苛政に苦しみ、訴ふれども諾かれざるを憤り、相謀つて竹槍賭旗を樹て暴行したのを、右近太夫忠政は兵を出して、これを鎮撫して後、巨魁三人を烏打峠に引出して磔刑に處し、與黨七百餘人の首を斬つたのである。即ち此七百餘人の亡靈を弔ふべく遺族の者によ

つて建てられたのが千人塚であるのだ。位置は金堂の東北に位し、墓の高さ二間餘、表面に南無阿彌陀佛の六字、並に斬首された總人数を刻し、他の三面には何村何誰某初め何人記されてある。されど今は文字磨滅して、能く判明しない。建てられた年月は、寛文二年八月十五日と註して在る。

佐藤兄弟の墓 山門の西側にある古い五輪の塔がそれである。文字は風雨のために洗はれて、定かにそれと讀み難いが、傳ふる所によれば、源九郎義經の臣、佐藤繼信先づ八島の戦ひに、主君の馬前に於て討死を爲し、それより平家滅亡の後、義經兄頼朝と不和になり、吉野に隠れし時、山門の僧に攻め立てられ、詮方盡き、弟忠信義經を無事に落さん欲して、一人踏み止まり自ら義經と名乗り敵軍を惱まし戦死を遂げたが、兄弟戦死の後に於て、

其母なる人が冥福を禱らんとて、建立したのであるといふ。後世に至り誰れ傳ふるともなく、小供の百日咳に功顯ありと稱し、參詣する者多く、今日尙香煙の縷々として絶えざるものがある。

爪彫の彌陀

親鸞聖人が、其昔善光寺に參籠せられた時、爪で石に彫られたものだといふ。彫刻頗る巧妙なものであるので、石刷りにして持歸る者が澤山にある。裏面には南無阿彌陀佛の名號が刻されて居る。

大佛

山門の下東側にあつて、別當大勸進と相對し、極めて尊容麗はしみの評判がある。蓮臺には享保壬寅歲四月建立願主東町法蓮寺弟子、水内郡善光寺村法譽圓位と刻されて居る。法蓮寺の弟子法譽圓位とは、何人なるかを知らず。雖も、説を爲す者は此大佛は、明曆年中江戸の八百屋お七が、

情夫吉三郎に逢はんと欲しても容易に逢へ得られない結果、娘心の淺ましきも、終に自家に放火し多數の燒死者を出したのも、畢竟自分の罪にあると、吉三郎はお七の火刑後、深川某寺の僧侶となつて、一には罪障を消滅せしめ、又一つにはお七が菩提を弔つて居たが、數年の後行衛不明になつたのは善光寺へ參詣し大佛を寄進のためであつたといふ。

地藏菩薩

山門と二王門の中間西側に在る。此の所は元祿頃まで善光寺本堂のあつた場所で、記念のため正徳二年間に建てられたのだが、惜しい哉明治二十四年の火災で燒失し、其後新らしく安置したのが今日の佛像である。善光寺金堂は草創以來、十回も炎上し其都度幾分づつ位置を變更されたやうだ。

五重塔跡 公園の地域内にあつたものだが、元祿十三年七月二十一日に金堂と共に焼失してしまつた。其後まだ機運熱せずして、再建の運びに至らずに居る。

駒返り橋 敷石の中ほどにある石橋を言ふ。右大將頼朝善光寺に参詣した時、此の所で乗馬を返したのが、此名ある所以である。

春日燈籠 山門下にあるものは、明治天皇御大葬の時、用ゐられたのを下賜せられ、又忠靈殿の前にあるものは、昭憲皇太后御葬儀の時用ゐられたのを、御下賜になつたのである。

忠靈殿 金堂の西に在る。維新以來國事に殉じた忠死者の英靈を祭り、追善供養を營むところになつて居る。建物は明治三十九年善光寺別時開帳に

當り造られたもので、其節は伊東元帥、東郷海軍大將、上村海軍中將、乃木陸軍大將等知名の士の参拜が尠なからずあつた。

寢釋迦 世尊院本堂に安置され、國寶になつて居る。本尊は紫金の釋迦涅槃の像で、天延三年四月中旬、越後國頸城郡古多の濱に漂着されたのを、善光寺に送られたのであつた。それ以後古多の濱を善光寺濱と呼ばれるやうになつたのである。

常念佛堂 縁起によるに、源頼朝の室政子の建立だといふことである。其頃は四十八人の時宗の僧侶が居つて、絶えず念佛供養し維新前まで現存して居たけれど、今は寶林院内に名を止むるだけに過ぎない。舊趾は城山小學校になつて居る。寶林院には亦吉原の名妓高雄の碑を存す。

阿闍梨池 本覺院の中にあつて、常に注連が張られてある。此池は平日は空だが、正月十八日より二十五日まで一七日の間に限り毎年満水するを以て例とする。これは皇圓阿闍梨が入定後も尚善光寺に參詣する驗だといふ。皇圓は比叡山功德院の學僧で、建久九年正月十八日、彌勒菩薩の出世を待つには、龍身となつて長生するに如かず、終に遠州櫻ヶ池に入定した。其櫻ヶ池の水が此阿闍梨池に通じて居るとかで、それ故入定後に於る皇圓の善光寺參詣が知れるのだと傳へられてある。爾來歲月の久しきに及び、池とは稱すれど尋常の井戸のやうなものになつたのだ。本覺院内の本善堂も亦古への善光寺の舊跡である。

法然上人舊跡 正治元年法然上人善光寺參詣の時、逗留せられた所

であつて、上人は善光寺參籠中に、等身人の自身の像を彫刻し、これを納めて平常如來給仕の意を残されたが、其當時より正信坊の持佛堂に安置され、後正信坊の本尊となつたのである。然るに先年の火災で燒失したのは惜しいことだ。

親鸞聖人舊跡 堂照坊にある。笹字の名號並に肉附の齒が寶物になつて居る。聖人堂照坊に御滯錫中、戸隠へも參詣せられたが歸途風越しと稱する所で、暫らく休憩せられ、戯れに路傍の岩笹を探り文守の形とした。此因縁によつて別に風越しの名號も稱す。肉附の齒は、聖人七十四歳の時のものだといふ。

曼陀羅堂 尊勝院の本尊當麻曼陀羅は、九條殿から寄附された有名なも

のである。

観音堂

王照院の御堂に安置せられ、同寺の縁起に随へば鎌倉の執權北條泰時の寄進だといふ。

薬師堂

最勝院に安置され、長和五年攝津國須磨浦に漂着したものと、同院の縁起に存す。

弘法大師像

吉祥院に在つて、大師自身の作と傳へらる。

太子堂

治承年間善光寺炎上の後、觀揚坊が造立したもので、今の淨願坊に在る。

十王堂

淨定上人が建立し、小野篁の作と傳ふる閻魔の像を安置す。これが十王堂の名残りである。

護摩堂

昔は善光寺の僧侶が、一百日間の加行を満了すれば、堂で三七日の護摩を供修したのだが、今では常徳院の御堂になつて居る。

縁起堂

淵の坊の御堂をいふので、縁起によると、善光寺繪詞縁起を秘藏されてあるといふ。

二天王門跡

今の二王門を南に距る半町ばかりの其所に、昔二天王があつたので、其附近は維新前高札を建てられた場所である。

此外善光寺の山内に在るものには、大勸進、大本願、兩廟所、御供所、佛足跡、聖徳太子碑等である。五百餘堂、八百餘社は皇極天皇の御代に建てられたといふけれど、現今では其名残りも認め可きものなく、又鐵燈籠、石燈籠の數に至りては、總計三百餘に上り、相馬彈正少弼室、石川播磨守、平

岡美濃守室、其他名家から澤山に寄進されて居る。燈籠の中にも貉燈籠と稱し、貉が寄進したといふ奇しき因縁話、尙それに似よつた物語も多いけれども略して置く。

金堂、山門等には明治四十年頃まで、全國信徒より寄進されたる釣燈籠、灯提、額の類夥しくあつたが、今では取除けられてしまつた。額には善光寺に参詣して、腰が立つたといふいざりの使用した下駄があり。又九州の者で夫婦が子供をつれ、善光寺に参詣の途中女房は旅の空に死し、亭主のみ子供を懐ろに入れて、道もはるく、漸く川中島附近に差かゝると、忽焉として死せる女房の亡靈はれ亭主から小供を受取り乳を啣ませ、亡靈ながら初一念の参詣を済したなきいふ、其因縁によつたものもあつたのである。これ等は

何れも、全國信徒の信仰心を象徴したものとはいへやう。

年中行事とお開帳

善光寺に於ける、年中行事のこどもを、記して見やう。

▽正月元旦 卯の刻に朝拜式が行はれる。先づ除夜の鐘の撞き止むを合圖に、衆徒、妻戸總出仕するに、大勸進住職大僧正は、侍僧等を随へて昇堂し、溜璃壇上にて御開帳を行ひ、十念が終つて閉帳になり退座する。續いて中衆總出仕を爲し、大本願上人昇堂、御開帳があつて莊嚴なる朝拜式を行はれるのである。此間を堂童子は御佛供を進献する例になつて居る。

▽同七日寅の刻 衆徒、中衆總出仕で開帳（油火の燈明）次に修正會、別

當御印文の加持を爲す。

▽春秋、季の彼岸日。

▽三月十五日會式。

▽七月十三、十四兩日祇園祭行はる（昔は六月）山車幔燈、夥しく踊狂言など善を盡し美を盡したるかの觀がある。近郷近在よりの人出多く、長野市は大に賑ふ。

▽孟蘭盆會、大鼓雲版を打ち、大念佛が行はれる（六月三十日大勸進、七月晦日大本願）

▽八月十二日お色市。

▽八月十四日施餓鬼。

▽十月五日より十四日まで大本願の十夜念佛修行。

▽十一月五日より十四日まで大勸進の十夜念佛開帳。

▽十一月十五日如來正覺の日にて會式。

▽十二月朔日から、堂童子清火して金堂に參籠する。

▽同日七五三繩張り、中衆残らず堂童子の坊に參會し祝儀があつて赤飯を總持中に配る。

▽同月二の申の日、夜に入つてから御年宮に於いて、如來御年越の規式が行はれる。（堂童子淨衣を着す、丑の刻に於て）極々の秘事であるので、如何なることが行はれるのか窺ひ知ることを得ない。但し備へ物は、一尺角の折敷に小片木三枚を入れ、一枚に餅二つ、御飯、白豆、煎おから、等四品をも

つて供ふ。四門へも一膳づつを供へる。此日金堂より一里餘を隔てる駒ヶ岳
 (上水内郡淺川村に在る) 駒弓の宮から、神主が木馬を持參する。これをお
 駒迎えと稱す。暮れの六時以後、念佛も、時の鐘も停止、山内人拂ひとなり、
 此式寅の刻に畢り、勤めの鐘を相圖に諸事舊に復すのである。

▽同月七日より十六日まで、晝夜別事、念佛施行、妻戸ばかりで勤行する。
 これを善光寺のトウ〜念佛といふ。

▽同月九日、堂童子より濁酒の御酒を金堂へ献備。

▽同月十日、松はやしの祝儀がある。

▽同月二十一日、女人禁制にて鏡餅五飾を取り、堂童子の寺に七五三を張
 置き、除夜に至つて金堂に飾り、正月八日に下ける。

▽同月二十八日、金堂煤拂ひ、堂童子と奉行こで行ふ。箒は竹に藁を結び、
 松と七五三をつける、濟みてから後箒を大勸進、大本願兩寺へ納める。

▽十二月三十一日、御松飾の式がある。

▽除夜から正月十五日まで、堂堂子淨衣着用、金堂に詰め切り十六日に及
 び退出す。

▽除夜の刻、大勸進、大本願、衆徒、中衆總出仕、開帳法會をなし(元
 朝には開帳なし) 御供物を衆徒、中衆、配當する。尙除夜より十五日までは、
 金堂其他の鍵は堂童子の預りで、諸事悉く堂童子任せになる。

▽御印文頂戴は、七日から十九日までに行はるのであるが、巡國又は三
 都開帳の節は、前立本尊に添へて大内に奉り、畏くも至上を初め女御更衣ま

でも戴き給ひしものであるといふ。此式に與る堂童子は如來より善光、彌生の像に印し、次に東西南北四門に捧げ、天地に戴き、大勸進大僧正の背面に印し、更らに大本願住職に戴かしめ、後山内の一老僧に授け、これを受取つた老僧は、堂童子に戴かせ、それより一山の衆僧に頂かせ、此嚴肅なる授與式が畢つて、參詣者の善男善女に及ぶことになつて居る。

▽門飾の松竹は堂童子の門ばかり、正月晦日迄其まな飾置き、二月朔日お駒送りと稱し、木馬を駒ヶ岳へ送り行く時、堂童子の門松竹も駒弓の神前で焚捨て、堂童子の勤めも終るのである。

▽前立本尊御開帳 前立本尊は七年に一度若しくは別時開帳の時に限り、開籠供養せられることになつて居る。此開帳は善光寺行事中、最も重きを爲

すものたるは言ふを俟たず。開帳中全國數百萬の信徒蟻集し、お膝元の長野市は、非常な賑ひを呈すること誠に想像以上である。

尙、最近御開帳のあつたのは大正七年であるから、此次は大正十三年と云ふ順序である。

四十九名所と附近名所舊跡

善光寺には古來七社、七橋、七池、七清水、七塚、七寺、七小路といふのがあるが、これを善光寺の四十九名所といふ。

▽七社 武井神社(東町) 妻科神社(妻科) 湯福神社(横澤町) 三輪神社(上水内郡三輪村) 加茂神社(腰) 笹焼神社(岡田) 木留神社(上水内郡芹

田村

▽七、橋 花相橋(後町別に返り橋と稱す) 應田橋(上水内郡三輪村) 筋違橋(岩石町) 獨寢橋(妻科) 駒返り橋(善光寺山門前) 淀ヶ橋(新町) 鶴ヶ橋(問御所町)

▽七、池 狐池(腰) 車池 櫻枝町或は來間池) 長刀池(西町西方寺境内) 牛池(廣小路) 鶴ヶ目池(後町) 花ヶ池(釋迦堂境内) 阿闍梨池(本覺院境内)

▽七、清水 箱清水(箱清水) 一盃清水(岩井堂) 夏目清水(新田町) 瓜割清水(新訪諏) 柳清水(三輪田町) 傾城清水(上水内郡淺川村) 鳴子清水(鳴子耕地)

▽七、塚 姫塚(上水内郡芹田村) 刈萱塚(往生寺) 時丸塚 上水内郡三輪村) 盲人塚(長野監獄構内) 柏崎塚(伊勢町) 虎ヶ塚(岩石小路) 繼信忠

信塚(善光寺西側)

▽七、寺 宗光寺(立町) 妙觀院(横澤町) 正法寺(後町) 明行寺(權堂町) 時丸寺(上水内郡三輪村) 十念寺(後町) 無常院(中御所)

▽七、小路 羅漢小路(今御靈屋小路といふ) 法然小路(今法然堂町といふ) 御花小路(梅小路とも稱す) 上堀小路 下堀小路 櫻小路(今の櫻枝町) 虎小路(岩石小路)

以上四十九名所に關しても亦、種々の善光寺如來に緣のある懐かしい物語があるのであるが、茲には其著名なるものを摘記して見る。

妻科神社 八坂刀賣命を祀り、健御名方命形神別命を配祀し、延喜式内に屬して居る。往時火災のため社傳記録のやうなものを悉く焼失したけれ

ど、口碑によると本多善光の子善佐を祀つてあるともいふ。善佐妻なし、これによつて妻なしの宮とも稱せられて居る。曾て妻科大明神といつたのだが、實曆十四年中妻科神社と改めたのであつた。

草ふかき野中のもりのつまやしろ

権僧正公朝

こや花すゝき穂にいでぬかも
あくるより暮るも知らずうぐひすの

淺井 冽

鳴音たえせぬつま科のさと

尚妻科神社に配して、武井神社には彌生の前を祀り、湯神社には善光を祀つてあるとも言はれて居る。

姫塚 市外芹田村字市村に在る。建久三年熊谷蓮生房の娘玉鶴姫が發心し、父の跡を尋ね來り、終に死去した所であるといふ。

虎ヶ塚

岩石小路の虎石庵に在る。虎石庵は大磯の遊女であつた、虎御前の住居したところである。曾我十郎、五郎の兄弟源頼朝が富士の巻狩りに當り、父河津祐成の敵工藤左衛門祐經を打ち、目出度く本懐を遂げたけれど、十郎祐成は其場を去らず仁田四郎忠常に討たれ、次いで五郎時致も誅に伏した。虎は祐成の死後、はるく信濃路に入り、更科郡稻里村字塔の腰で縁の髪を剃り、土中に埋め、同村野池で變り果てたる自分の姿を水に寫し、善光寺に來つて庵を結び、永く祐成の後世を弔つた舊蹟である。時に歳十九、虎の髪を埋めた所には今尚塚を存す。川中島の戦争に戦歿したる兩角豊後守の墓と、少しばかりの間を隔つて居るに過ぎない。土人其塚を發掘しやうとしたが、狂氣したので俄かに中止したとやらで、爾後崇りを恐れ手だに觸る

る者が無いといふ。

正法寺

建久年間、上水内郡見登山城主和歌月石見守の次男重勝の開基にかゝる。重勝始め知覺法印といつたが後親鸞上人の徒弟となり、名を證誓と改めた。

十念寺

淨土宗に属す。建久八年六月源頼朝善光寺に参詣の節建立せられたものだ。時の住職を念阿三稱した。後に至り大久保石見守用地として境内の一部を引揚げてから、境内は狭められたのである。開基以來の老松今尙存し居るも、不幸枯死してしまつた。

時丸寺

これにも善光寺如來に關聯した因縁話が伴ふ。正歴年中に大和國三輪の里に時丸といふ者があつた。させる病氣もなくして頓死したが、獄卒

其魂を拉して閻魔の廳に引出すや、大王聲荒らけ汝佛法流布の世に生れながら、いまだ一度も念佛を受けず、日夜悪業つので此の所に來れりと、百雷の落つるが如き聲をもつて叱り給ふ時、忽焉として空中に聲あり、此の者善光寺に歩みを運び、一光三尊佛を禮拜したことがあるといふ。大王大きに驚き時丸を調べると、時丸の曰く、母は越後の生れにして自分が胎内に在りし時、越後への歸るさに善光寺に参詣したこのことを、常々母の話によつて聞いて居た趣を答ふるに、大王は其儘時丸を娑婆に歸したといふ。時丸は蘇生後善光寺如來の有難さに喜悅し、善光寺に來つて庵を給ひ如來を給仕しながら生涯を終つたのであつた。今その所を三輪村三稱し、寺號を三輪山時丸寺といふて居る。

由縁の社寺と傳説

善光寺に由縁ある神社佛閣につき、またなか／＼に記す可く興の盡きないものがある。今それ等をひとまとめにして、歴史を参考し傳説によつて紹介する事としやう。

善光寺年神堂 善光寺の年神堂といふのは、今の城山に在る縣社御名方富命彦神別神社が即ちそれである。明治の初め頃までは善光寺金堂の裏にあつたのを、其後明治十一年六月現在の場所に移されたので、境内には他に多くの小祠の存するを見る。尙縣社の傍には佳郷館と稱した、明治天皇行幸の節の行在所があつただけけれど、明治二十四年六月の火災に際し、類焼の

不幸を見たは、返す／＼も遺憾の極みである。天皇の行幸は實に明治十一年で、畏くも五郡を一望し、風光の佳なるを賞し給ひ、佳郷々々と仰せられしによつて、乃ち此佳郷館の名がある所以である。

往生寺 善光寺から西北六町を隔て、急坂を登り、往生寺山の山麓に存す。寺號を寂照院往生寺といふのである。狂言綺語にも傳へらるる、近衛院の御宇、筑前、筑後、肥前、肥後、日向、大隅等六ヶ國の領主たりし加藤左衛門左重氏は、筑前國三笠郡苜萱の莊、博多城に居住して居たが、二十一歳の時しも、花に浮れて酒宴をして居た所が、心憎くき春の山風に、蕾の花一輪盃中に落ちて來たのを見て、忽ちにして無常を觀じ、誰れか百年の齡を期する者あらんや、老少不定は此花の如しと、妻子を捨てて帝都に上り、叡空

上人に見え、剃髮得道し、名も等阿法師と改め、後高野山に登り、青道心となつて行ひすましたのであつた。然るに嫡子石童丸、重氏を高野山に尋ねて來たが、恩愛は菩提のためには隙りありと、更に親子の名乗りをせずして、石童丸を弟子としたので、石童丸も髮を落し信生房道念と號した。重氏の等阿法師思ひけらく、親子一緒に居ては所詮恩愛の羈絆を切り難しと、意を決し、高野山を去り善光寺に來り、初め石童町西光寺に足を止め、如來堂に參詣する外別に餘念のなかつたのである。所が一夜夢に、内室柱の前、姫千代鶴及び千里の前が善光寺如來と共に現はれて、等阿は地藏菩薩の化身であるから、速に地藏の像を造立し、衆生を化益するがよいといふ託宣があつたので、往生寺に庵を移し、地藏を建て供養しつつ、八十三歳の高齡を保ち往生を遂

けたのである。其夜高野山では石童丸の道念は靈夢を受けて、父等阿法師の命終疑ひなきを得し、急ぎ善光寺に來つて大法要を修し、等阿自身の刻みたる地藏を拜し、道念も亦傍に同じく地藏菩薩を建て、後二年を経て六十二歳で入寂したのである。世に言ふ親子地藏の因縁は、先づさつと此邊で止めて置く。寺傳には地藏の傍に樹てる松は、三代目實生の彌陀來迎の松だと言つて居る。境内は櫻の名所で、頗る老木の枝垂れもあるので、春の盛りを花見に杖を曳く者が多い。

大峯山麓の古蹟

善光寺の西北に當り、官林の松茸をもつて有名になつて居るが、此山麓一帯は其昔善光寺草創の最古の舊蹟のやうに傳へられて居る。其中腹の五輪平からは石塔類の非常に古いものが現はれたり、歴史

家の参考になるやうな板碑も出て居る。そうして其所には岩井道の清水もあれば、弘法大師に關係した傳説もある。更らに現今長野高等女學校になつて居る附近からは、國文寺式の古瓦も出たりなどして、塔の窪などの地名によつても其名残りを偲ばれて居る。大峰山は天文年間村上義清の幕下大峰大内藏の居城であつたが、後に幕府より善光寺に寄進になつた。これによつて善光寺のお花山ともいふ。

頼朝山靜松寺

善光寺を西に約一里ばかりの地點、葛山の麓、横棚といふ所に在る。四邊山をもつて圍み、常に松籟の和する音を聞くのみで、極めて閑寂の地であるのだ。元は天台宗であつたけれど、天正十五年淨土宗に改めた。開基は頼朝坊智盛法師といふ。智盛は近江の人であつたが、承平三

年三月善光寺に參詣し、閑靜の地を求め堂宇を立てんことを望み、遂に一寺を此の所に建立するに至つた。貞元二年八月八十三歳で、左手の掌に頼朝の二字を記し、端座合掌靜かに入寂したといふ。斯くて建久八年になり右大將頼朝善光寺に来れる序に此寺にも參詣し、智盛法師が遺持の發佛を拜し頼朝坊は自分の前身に相違なしと稱し、歸依渴仰の餘り、山林田畑を寄進し、時の住職に多くの引出物を與へたさうである。此靜松寺を葛山に因んだ戦さ物語がある。今それを掻い摘んで記るさうならば、葛山には建武年間に、落合氏が築城して代々威を四方に奮つて居つた。天文年間に至り落合備中守、葛尾山の城主村上義清に屬して居たが、同廿二年八月義清、甲斐の武田信玄の爲に追はれて越後に走るや、落合氏も亦上杉謙信の手に隨つて、武田の軍

を防がんと糧食を蓄へ、盛んに防備を加へたのであつた。弘治三年に至り甲斐の院將馬場美濃守信房、一萬七千の大勢を率ゐる、葛山の孤城を揉みに揉んで攻め立たけれど、嶮崖無双の要害であつたため、如何にしても抜くことが出来なかつた。此時に際し栗田の城主栗田刑部等、武田氏に降伏し居り、葛山城攻撃の加勢になつて居たが、靜松寺の住職を招き、葛山より漲り落つる水を目指し、水利の便を聞き質したところ、住職の言ふやうは、彼の山に彼の如き水の出づ可き理由なし、これは畢竟蓄へ置ける糧食の米を落し、水のやうに見せ、武田の軍勢を偽り居るに相違なしといつたので、寄せ手の大將馬場美濃守は大に喜び、無二無三に城の搦手近く兵を攻め寄せ、火をかけて焼き拂つたのである。備中守力の限り奮戦したが、終に敵手に斃れ城

は忽ち陥つた。今日では葛山附近に遊ぶ者、城中の糧食倉を中心として少しく土を穿てば、土にやけ硬化したる米麥が出て来るのを認められ、戦國時代の昔を偲び、轉た感慨の無量なるものがある。傳説には備中守深く靜松寺の住職を怨み死んだが、其祟りにて後世も同寺の住職になれば、必ず心狂ひ、目に赤きものを見て夭死すると稱せられて居る。今果して如何にや。

往生院

權堂町に在る。正治二年法然上人の開基にかかり本尊には同上人の木像を祠る。寛永十九年五月九日、善光寺町から出火し、善光寺金堂を焼失した時、重建の成るまで如來を安置した假堂である。權堂町の名は、蓋しこれによつて起つたのであつた。明治維新少し過ぎる頃まで、權堂町の裏表を通じ、酒樓櫛比し、百數十の遊女、頻りに客を招いたのであつたが、此

所謂宿場女郎の全盛を極めた基は、往生院に如來安置せられ、遠國より參詣に來た者の袖を、旅宿の飯盛りなきが引いたのに初まる。今でも權堂を通行すれば、家屋の構造によつて昔の面影を偲び得るもの、幾十軒となくあるのである。今の真權堂町鶴林館は紀伊國屋の跡で、藝妓見番事務所は紀伊國屋の跡である。幕府時代には權堂町は舊松代藩に屬し鐘鐺川以北は善光寺領になつて居たので、善光寺領の若い者が權堂の酒樓に遊び、無錢飲食をしたまま、裏口から鐘鐺川の蹴ね橋を渡つて逃げたこともあつたけれど、領分違ひのため酒樓では如何とも爲す能はず、當惑したといふ珍話もある。花柳界にありうちなる纏綿たる情事は勿論、情死などの行はれた例もあるが、それ等を記すには、餘りに煩はしいからやめて置かう。

荊萱山西光寺

善光寺より南十數町の地點石堂町に存す。荊萱山寂照院西光寺といふ。此寺は筑前國博多の加藤左衛門重氏が發心し、寂照坊等阿法師になつてから、善光寺に參詣した時に開基したものだ。等阿法師の死後、其子石童丸亦來り住み、石堂町の名はこれに因んで居るのである。石堂町から山門に入る左側に建てられた三基の多重塔は、古色蒼然として一見直に數百年前のものなることを思はしむるが、これ即ち加藤重氏、千里の前、石童丸の墓であるといふ説明をされて居る。寺の屋根は今でも葺葺で、美々しく飾られた商舗と墓を列ねたるまま、特殊の印象を與へずには置かぬのである。重寶として建暦元年親鸞聖人善光寺參詣の節、五十日間此寺に逗留せられ、一日に一體つづつ不二の名號を残し、それから戸隠山に登り、三尊佛の來

迎を拜し其御影を作つたものを、これを御山入の御影として藏されて居る。此外白狐の靈石、天竺傳來の伽羅佛延命地藏尊、桔梗八ツ花形明鏡、磬鉦鼓等を存して居る。又境内に重氏夫婦の墓と相對して、朝日山大蛇の墓がある。墓誌に曰く、畜轉善達(大蛇)得圓妙了(小蛇)云、小蛇の方にはまだ朱がさされてある。件の大蛇小蛇についての傳説を紹介しやう。

天明六年の頃かとも、西光寺から四五軒南の家に一人の樵夫があつた、或る時朝日山へ分け入り、一本の大樹の横はり居るのを見て、携えたる斧を揮つて一太刀打下すと其大樹がツル／＼動き出したので、不審に思ひ能く／＼見れば、樹てはなく大蛇であつたのである、樵夫は驚いたけれど難を恐れ、勇氣をふるひ起し、頭部を粉碎してしまひ、三尺ばかりづゝに斬り家へ持歸つた、併し只置いてもつ

まらぬので往來に曝し見世物として錢を取り、思はぬ金儲けをしたのである、然るにそれより數十日を経るや、樵夫死し、妻も死し、多勢あつた小供まで残らず死し、剩へ隣家の者までが病氣にかゝつたので、これ必ず殺された大蛇の祟りであるといふので、町の有志相集り大勸進住一職を導師として、靈を慰さめ、墓石を建てたのである、今に至るも其樵夫の屋敷跡には、折々小蛇の集ることがあるといふ、墓石に註した小蛇の方は、また朝日山の奥深く潜んで死なぬため、朱を加へて置くのである、境内は芭蕉の碑がある。

雪ちるやほやのすゝきのかりのこし

芭蕉

牛に牽かれて善光寺詣り

昔信州小縣郡に老婆があつた。性來邪見で佛法を信ぜず、却て念佛供養などする者を、惡しざまに罵るを常にしたが、或る時千曲川の畔で布を晒らして居ると、忽焉として大きな牛が現はれ、老婆の晒らして居た布を角に巻きつけるを見らるや、一散に走り出したのである。老婆は一生懸命に跡を追ひかけると、牛はやがて善光寺に逃げ込んだので、續いて老婆も金堂に驅入り見れば、牛は何所へか消え去つて形を認むる由がなかつた。致方ないので其夜は金堂に心にもあらぬ參籠を爲し、翌日トボく昨日來れる道を歩む折柄、段々睡氣を催して來たので、小縣郡の或る觀音堂に入り、晝寢の夢を食ぼつて居るに、昨日角に布を巻いた牛が堂の内にあるを見て夢が覺めたから、若しやと思つて四邊を見ると、本尊の觀世音菩薩が首に布をかけ居給ふより、偕

ては牛と見たるは觀世音で、われを善光寺に道引たまへる方便であつたかと、難有さ骨身に徹り、邪見の心を翻へし、專修念佛の行者となつたといふ。今日でも小縣郡には布引の觀音が在り、其附近千曲川の畔には、布引岩と稱するのが残つて居る。

世をすくふはちすの糸にひかれ來て

ふかきえにしをむすぶこのてら

讀人知らず

著名の參詣者

右大將源賴朝を初めとして、善光寺へは古來有名な人物が參詣したことは、略推察し得らるるのだが、名僧智識の部では平安朝時代に傳教大師、

弘法大師、慈覺大師、法然上人、親鸞聖人、晝寫山性空上人、俊乘坊源重などが来たことは、記録によつても能く知れるのである。別しては弘法大師滞錫中、岩窟に一字を建立したといふのは、岩井堂觀世音舊趾のここであらう。慈覺大師にあつては、法華、常行の二堂を建立したとある。性空上人は僧六十六人を請じ誦經し、毎朝一卷經の偈を作つた。今日でも行はれつつあるところのもの、即ちそれであるといふ。奈良東大寺大勸進俊乘坊源重は、東の門から金堂まで往復四十八回した。四十八度踏みはこれが嚆矢であるともいふ。

一
舊蹟はないけれど、源氏の爲に南都で首を斬られた平重衡の妾、白川宿長者の娘千手の前も、重衡死後菩提を弔はんとして善光寺に來り、行ひ濟ま

したことは平家物語にも載せてある。惡源太義平の妾なる者、義平の遺骨を携へ、善光寺に程遠からぬ、栗田の郷に埋葬したといふこともある。鎌倉時代に於る虎御前、熊谷次郎の娘玉鶴がこゝはさらなり、僧侶では法然上人も、親鸞聖人も參詣し、遊行寺二世他阿上人のこゝは上記の通りである。

足利時代になり、幾惠法師の善光寺紀行文に言ふ

寛正六年七月……西の刻の斜なるに、御堂にまうて侍り、思はざるに引導する人ありて、内陣に通夜せり、剩へ本尊の瑠璃壇を巡ぐりき、まことに多劫の宿縁淺からずおぼへて、歡喜の涙せきあへず、如來本願御瑞現の往昔までも思ひつゞけて

てらせなほにごりにしまぬ難波江の、あしまに見へしありあけの月

二回目の参籠にあつては
 文あきらけき年の六月十四、十五夜には、善光寺に詣て御堂に夜し侍り、即ち
 彼の寺務の宿老内陣に侍りしかば、此身をかへずして淨利にいたれるかとも覺ゆ
 るに……

徳川五代將軍の母桂昌院（家光の側室）が、自ら参詣こそせねど代拜を遣
 はした事など、善光寺に歸依浅からぬを察するに足り、大勸進、大本願に
 は寄附の寶物も多い。時代は少しく前後するが、福島正則高井郡井上村に流
 謫せられしを怒り、家臣等本國に反旗を翻へさうとするのを見て、幕命によ
 り天海僧正が正則を説くために高井郡に來り、善光寺を参詣したことも明ら
 かである。

理想小説の大家寶井馬琴が、有名なる八犬傳を書きつつある時、越後國の
 愛讀者の要望に隨ひ、作中の人物犬田小文吾を越後方面に遊歴せしめんこの
 存意より、自身越後に赴き、歸途善光寺に來た形跡もある。滑稽小説をもつ
 て鳴つた十遍舎一九も、回歴の節善光寺町の旅館に投宿し、善光寺にも参拜
 したのであつた。俳人として芭蕉、宗祇、歌人太田蜀山人の事は、ものした
 る歌くづによつても知られるであらふ。

難波江にあしとすてにしみ佛も

蜀山人

いまは信濃によしみつのでら

善ひかる寺で月見る今宵かな
 月かけや四門四宗もたゞひとつ
 遠からぬこの極樂やほととぎす

宗祇
 芭蕉
 支考

徳川時代の有名な漢學者塚田大峯は、此善光寺町の生れであるのだ。善光寺を賦して曰く

無量壽佛無量名、獨此無量壽佛榮、
可識丈夫窮與達、亦唯在腹衆人情。
東都北信路悠々、搔首西風憶昔遊、
照得墨陀江上月、善光寺裡作中秋。
西來聖教久東漸、此處青山生紫風、
知是天堂攀可到、雲中湧出大伽藍。
大 峰
枕 山
春 濤

善光寺保存會

要するに三國一の靈場たる善光寺は、交通益々開け、信徒の數愈多きを

加ふるにつれて、佛教信仰の府たるここに疑ひはないのである。これによつて往昔芋井の郷と稱せられた一寒村は、其後幾何もなくして善光寺村となり、長野町となり、終に長野市とまで進歩發展したのであつた。長野市を佛都といふ所以に見ても、現今四萬餘の市民が、如來の恩澤にあづかるもの甚だしきを知るであらふ。若し夫れ東洋一の稱ある大伽藍に至りては、過去千二百餘年間に、前後十一回も回祿の災にかかつて居るのだが、今後重ねて炎上等のことありとせば、獨り長野市民の受くる損害大なるのみに止まらず、全國佛教信徒の精神的に蒙る損失は、到底有形の數字などによつて算出し得る事は出來ないのである。假りに直に重建の計畫立てられたとするも、其費額巨大にして、全國信徒の熱烈なる喜捨奉加も、容易に舊形に復すること思ひ

も寄らない。茲に於て乎、明治三十八年内務省の許可を受け、資金一百萬圓の財團法人善光寺保存會の設立を見るに立つた次第である。設立の目的は堂塔伽藍を保存し、仁王門其他再興にあるのであるが、仁王門は幸ひにも大正七年に落成した。爾餘の建造物は追々に昔時の状態に復す事と思はれる。何れは七堂伽藍の完備する日も遠きにあらず信ぜられるけれど、此大事業を双肩に擔ふ保存會の任や、實に重且つ人と言はなくてはなるまい。全國の信徒等も、善光寺如來によつて受ける精神的の利益を思ふならば、宜しく保存會をして責任を果さしむる心掛けがなくてはならない。斯くてこそ如來の靈光いや増しに加はり、佛教の淵源を擁護し得る事になるであらう。

川中島古戰場

川中島の合戦は關ヶ原合戦に我が國史上の盛華である、天文二十二年から永祿四年に至る正に十八星霜の久しきに亘つて互に甲斐の勇將武田晴信入道信玄と越後の勇將上杉虎輝入道謙信とが勝負を決せんと大軍を率ゐて千軍萬馬を叱咤し智將、名將俱に智謀を絞り機略を盡した、龍圖虎攘の激戦の跡は嘗に行人の感慨に堪たふるのみでなく更に甲越兩軍幾萬の猛將勇卒、不世出の主帥の下に奮闘した史實と實蹟とを止むる點に於て正に我が信州人にとつて好個の記念でもあり且つ吾人の爲めに無限の教化を遺された天恵を欣ぶのである、若し夫れ夜色沈々月なく星寒き夕べ、來つて荒墳殘壘を訪はば一

陣の醒風起る所凄慘の氣自ら人を襲ふの感あらしむるのである。英雄逝きて
今正に四百年人文の發達に連れて今は此のあたりの田園拓けて人家相望むと
雖も山影水色猶ほ昔を語り轉た追懐の情に堪えざるものがある。

龍いかり虎うそふきし跡いつこ
桑畑青く麥秀てたり

佐々木信綱

○

元是英雄酣戰地、兩山雲合雨冥々、
須臾雲散雨還歇、萬頂平田粳稻青。

大窪詩佛

昔時川中島を稱したのは其範圍頗る廣大で更級、埴科、上水、上高の四郡に
跨つた、現在の川中島を稱す所は善光寺平の一部で更級郡、北擔部即ち稻

里、中津、御厨、布施の諸村を中心として犀、千曲の兩川の相合する一帶の
地の總稱である、若し夫れ善光寺參拜の途次古戰場を訪ねんとせば長野市よ
り自働車、俥に依るも佳なれども最も便とするは信越線川中島驛で更に亦河東
線松代驛に下車するも、信越線篠の井驛に下車するも俱に便で何れも俥、自
働車の便がある。

龜田鵬齋

○
雙江水急勢奔騰、五戰雄風裂眼稜、
西壤山頭陣氛滅、海津城上炊煙蒸、
胡床握嬰濤聲歛、單騎振刀山頂崩、
中島蒼茫斜照裏、殺氣猶看結如繩。

梁川星巖

○
千山回野蟲、二水夾墟通、云是河中島、當年角兩雄。

難聲晴亦雨、不見兵戈集、西天月一弓。

○

横井小楠

龍虎誰論劣與優、何人不說筑河洲、
即今若令兩公在、也用當年兵法不。

八幡原

長野市を距る二里、河東線金山停車場、松代停車場、信越線
の井驛川中島線を距たる何れも里餘川中島の内更級郡小島田村の附近一帯
の總稱である。松代街道の傍ら八幡の小祠がある八幡の宮は天文二十三年山
本勘介海津城を築くに當つて其年丁度癸年に當り古諺に傳はる千曲川の茫濫
を恐れ水難除に勸請したものだと傳ふ、八幡原は永祿四年即ち最終の激戦地
で夙に人口に膾炙する所で所謂越軍は車懸りの陣を設け甲軍亦た箕の手の備
を爲して之れを防いだ地で正に是れ千軍萬馬甲越兩軍の將士が血を流し骨を

曝し、修羅の巻を演出した舊跡である、一説には天文二十三年の役に謙信自
ら十二騎を従へ暮然敵信立の幕營を衝き直ちに刀を揮つて信立に斬り付け、
信立刀を抜く暇なく手にせる軍扇を以て之れを受くる事十合、其の二の太刀
は信立の肩先深く傷け甚た危く見えた時甲將原虎昌來つて之れを助け信立は
間を得て逃れ謙信遂ひに長蛇を逸した所は即ち此の附近にある七太刀三太刀
の地と稱する畑地であるか此の畑からは不思議な形の麥を年々産出するので
里人此れを逆麥と言つて居る。

○ 降ると見て笠さるひまもなかりけり

○ 川中島の夕立の雨

頼山陽

鞭聲蕭々夜一涉河、曉見千兵擁大牙、
遺恨十年磨一劍、流星光底逸長蛇。

直戰場

八幡原にあつて題して「甲越直戰場」云ふ乃木將軍の書する
大碑がある、明治三十五年五月皇太子殿下行啓ありて明治三十九年五月には
伊東、東郷、上村三大將が此附近を跋渉して此所に何れも手植の松がある直
戰場の碑は最も戦争の激烈を極めた所を撰で建たものであるが今只だ此邊り
野草芒々として僅かに昔の佛を語るのみである。

夏草やつはものどもの夢の跡

燕 翁

多田北溟

老樹横途勢欲衝、怪禽叫斷夕陽春、
我來懷古意悽惻、風雨和爲陣。 琴

妻女山

松代町の西端清野村地籍にある、頂上に登りて一望すれば海
津城下を瞰下し遙かに眼界開けて善光寺平を一時に集め古戦場の跡歴々指示
するを得、流石に勇將の陣地を撰みたるもの決して偶然ではない、妻女山は
永祿四年即ち川中島最終の役に越將謙信自ら此處に陣容を備へた一方甲將
信立は智將勘介道鬼の軍略を用ゐて妻女山の陣を包圍夜襲を企てた、然るに
謙信は敵の本營に當つて炊煙の上を見て疾くも此れを觀破し、急に此山の
陣を徹して終つた武田勢は河を涉り溪を越えて陣に近付いて見れば空しく捨
て篝りのみ燃えて人の影だも止めない、陣を徹した上杉勢は川中島に出で黎
明遂に此處で最後の大血戦を開いた所であると云ふ、山頂に松代藩士の招
魂社がある、明治三十五年東宮殿下親しく登臨して古戦場を嚮はせられた。

茶白山 信越線篠の井、川中島驛より各一里、長野市よりは安茂里村を
 経れば二里二十丁、更級郡信里村大字有旅の地籍ありて北方共和村中尾山
 に連なり、頂上より瞰下すれば川中島の風光一望の中に驛まりて激戦奮闘
 の跡一々指點し得、東方遙かに妻女山に對し、海津城を臨み頗る景勝の地で
 ある、永祿四年第五回の戦ひに武田信玄が二萬の精銳を率ゐて此所に陣を張
 つた、時に同じく妻女山頂に陣した上杉謙信が遙かに之れを眺めて優々朗詠
 を吟じ三絃を弾じ大杯を傾け悠然と構へ必勝を示した、敵に機先を制せられ
 た信玄は到底勝戦の望を囑し能はぬので遂ひに海津城に陣を移した。

兩角豊後守の墓 五輪塚とも云ふ、更級郡稻里村字塔の腰松代街道の
 路傍にある、此附近を陣場河原とも云つて八幡原に次ぐ激戦地である、永祿

四年の秋此の邊りの激戦に甲軍利あらず味方の士氣大いに衰へ、剩る副將武
 田典厩が討死したと聞いて憤然棄て身となつた勇將豊後守昌清は桶皮胴の大
 鎧に火焰頭の兜勇ましく單騎群がる敵に割つて入り奮闘しながら電光石火の
 如く遂ひに戦死した所である。

典厩寺 長野市を距る約二里松代街道に沿ひ西寺尾村水澤にあつて武田
 典厩信繁の墳墓地である、信繁は信虎の第二子で左馬介又は左典厩とも稱し
 た信繁は勇猛無双の武將で越軍恐れて悉く其鋒を避けた有様であつたが永祿
 四年川中島第五回の激戦に越軍の將宇佐美定行と接戦縦横奮進敵を惱す事
 多かつたが遂に宇佐美の臣下の狙撃する所となつて之に死した、寺には信繁
 の遺物什寶等が種々ある。

山本勘介の墓

眇目で跣足で短身ではあつたが彼の胸中より絞り出た兵機軍略は越軍を惨々に悩ました、永祿四年川中島最後の入戦に年六十九で奮死した、昔は八幡原胴合橋の傍にあつたが元文中松代藩士原某が現在の地に改葬し墓は同藩の國老鎌原某が再建した、河東線金井山停車場で下車すれば数丁寺尾村字柴、大鐘寺の西北阿彌陀堂の境内にある。

松樹陰森雲巖、荒墳苔老冷秋葦。
可憐謀亂身先死、奇骨空爲河島鬼。

多田北溟

胴合橋

水澤典厩寺に八幡原に通づる中央小流れに架された小石橋である、山本入道道鬼が東福寺村泥真木明神附近で戦死して此所に胴が流れて來

た其臣某が勘介の首級を敵手から奪ひ返して其胴と首とを合せた所で此名がある。

狐塚

武田の一族、小笠原若狭守長詮が越軍に取圍まれて、既に危急と見えたと時、家臣桑山茂見が身替りに立つたので九死は遁れたが打落された佩劍は雑兵の死體と共に土中へ埋もつた。處が此佩劍は三條小鍛冶宗近が一代の傑作で、藤の森稻荷大明神が向ふ槌を打つたと云ふ傳説から狐丸と命名されたものであるが、これかあらぬか此名劍の埋もつて居る傍らを多數の狐が集合して守護して居る有様を、里人が奇異に思つて取沙汰して居るのを、若狭守が聞知つて發掘した跡を狐塚と稱して居る。稻里村字廣田附近にある。

首塚

甲越兩軍勇士の戦死した首級を埋めた處で、八幡宮の附近にその大

きなのが二箇所ある。其一つの塚には、文政四辛巳年十月十四日權大僧都器山有慶法印長全と彫刻した墓石が建つて居る。他の一つには、徳本行者(1)名號の碑があつて、此の塚を一名一條右衛門の塚と云ひ、眞島村の筆弟共の建つたものである。

横田河原 更級郡 榮村大字上下横田の一帶を云ふ養和元年六月木曾義仲が越後鳥坂の城主城質長と其舍弟四郎長茂の兵四萬と此地に戦ひ、壽永元年九月再び城長茂と戦ひ之を破つた所であると同時に天文二十一年謙信が此邊一帶に兵備を配置し、更に永祿元年婿和破裂の際も亦越軍の大方は屯在した所である。

松代城址 海津城とも云ふ、甲斐の將信立が天文二十二年の雨の宮雪合

戦に於て慘敗し兵を屯する所なく、智將山本勘介晴幸に繩張せしめて造營僅かに八十日間を以て築かした一城は即ち此の松代城で當時にあつては模範城と稱せられた、武田氏亡びて後、森長可、之れに居り、次で上杉景勝に屬したが徳川に至つて森、松平、仙石、酒井の諸將を経て元和八年眞田信幸上田より移るに及んで子孫世襲して相繼いだものであるが明治維新の際、樓櫓門櫓悉く破壊し尋いで祝融の災を被り、今は稻田桑園の間殘壘墟濠名殘を止めて空しく虫聲の唧々たるを聞くのみである。

勘介の宮 永祿四年最終の戦に於て夜襲の計劃が美事に敗れ勘介遺徳やる方なく胸中死を決して敵に向ひ獅子奮迅の勢ひで戦つたが衆寡敵せず遂に此所で討死した、勘介の宮は篠の井から松代に通ずる街道更級郡東福寺村

にある。

葛尾城趾 信越線坂城驛より里餘の東方に聳ゆる高峰、名高き鏡臺山の連脈葛尾山頂に代々村上氏の居城がある、天文十六年城主井上義清武田信玄の爲めに上田原の一戦に敗れ城遂ひに陥つた、殘壘遺礎、今悉く草に埋れて昔日の面影をさどむるものなけれど萬感交々起つて去るに忍びざるものがある、頂上の眺望誠に宜敷く、千曲の清流其麓を遶りて風景頗る佳、義清の父、國清の墓は其麓字御所澤にある更に葛尾城趾を數丁距てた戸倉から上山田に通ずる所に義清の妻某が落城の際逃れて橋を渡らんとして一錢の貯なく即ち頭上の笄を與へて渡つたと傳られる『こうがひの渡』がある。

村上義清の墓 信越線坂城驛から約五丁坂城町田町に在る、又同町村

上山満泉寺は村上家累代の菩提寺で寺に村上家の遺物を多々藏して居る。

高坂彈正昌信の墓 昌信は甲斐豪族春日大隅の子で、小諸城代となり轉じて海津城を固守して越軍を惱した勇將であつたが信玄死して味方の兵勢振はざるに憂々病を得て天正六年五月年五十三で歿した、『甲陽軍鑑』は實に彼れの著である、昌信の墓は松代から南方三里弱豊榮村峠屋、明德寺東南隅籠にある、同寺に鎗、鐵砲、鐵等の遺物がある、明德寺は年々四月下旬無数の群蛙鳴々として喧噪し、古來蛙合戦の名著る。

瘦蛙負けるな一茶こゝにあり 一茶

姨捨山

「秋風はたちにはけらしな更級や姨捨山の夕月の空」信山、信水の間、春たつ事は遅れき、さりわけて秋たつ事はいさ早い、此れ山國の自然である、樹々の梢を渡る朝夕の風爽やかに、野邊の桔梗撫子草さり／＼に秋の情趣を添える頃ひ、冠着山下姨捨山中秋観月は秋に入る信州の表徴とも云ふべきである、姨智山は中央縁姨捨驛を距る僅かに三丁更級八幡村姨捨の山腹に在つて古來觀月の勝地として田毎の月の名、海内に著る、姥石と云ふ高さ五丈、横十間餘の巨岩は鬱蒼たる柱の老樹に隣り其境内に在つて車窓から望む事を得る、大和物語に記るされた。

「しなぬの更級と云ふ處に男住みけり。若き時に親は死にければ、姥なん親の如くに相添へてあるに、其妻の心さがなくて、姑の老かがりたるを惡みつつ、かき抱きて深き山に捨てたまへてよとのみ責めければ、男月のあかき夜、かき負ひて高き山にはるばる登りそこに捨て置きて逃れ來ぬ。さて家に来て思ふに、年頃親の如くに養ひつつ、相添ひてありければ、いと悲しく覺えけり。此の山上より月いとあかく出でたるを眺めつつ、夜ひとよも寢られず、悲しく覺えければ、

我心なぐさめかねつ更級や姥山に照る月を見て

と詠みてなん又ゆきて返して來にけり』

云々は此姥石に絡まるローマンスである、傍らの満月殿に桃觀音が安置され

て居る、更に放光院長樂寺本堂に接して觀月堂がある、田毎とは即ち其欄トの段々たる四十八枚の田を云ふので今は昔、大名が此の田の稻を刈らせて水を張り田毎に咲る月を觀賞したと云ふ觀樂の名残を止め、如何にも時代世相を物語つて居る、堂に上りて欄に倚れば遙かに鏡臺山を挾んで、山麓を繞る千曲の清流は宛然長蛇の如く、曠汎限り無き善光寺平原は、瞬ち一眸に集り、心氣自から清新を覺ゆる、殊に此邊り一帶高岳の象備り四時眞に風光明媚、山紫水明の信州の縮圖と云ふべきである就中陰曆八月十五日の夜、彼の鏡臺山嶺に昇る明鐘は團々清光を放つて其美觀壯嚴の狀、到底一管の筆以て能く表し盡くるものでない、此の日は長野運輸事務所では縣下は勿論、縣外各方面から集る觀月客、文人墨客の爲に臨時列車を運轉し、客車を増結して

其の混雜を防ぐのであるが、同夜は爲に満山人に埋る程の殷賑を極める。猶此附近に姥捨十三景と稱へて、冠ヶ岳、鏡臺山、有明山、一重山、姥石、甥石、小袋石、更級川、田毎の月、桂樹、寶ヶ池、雲井橋の名所がある。

佛や姥ひさりなく月の友
歸る雁田毎の月の曇る夜に
信濃にも老の子はありけふの月

芭 蕉 村 角
其 田 齋
龜 田 齋

○ 天宮雲斂玉奩開、清影粧成倚鏡臺、
千個水田千個月、似群蠶擁姐娥來。

佐久間象山

○ 天姥山頭秋月明、天姥山下秋月清、

夜深好執紫簫管。丹桂花陰學鳳聲。

鎌倉右大臣

月見れば衣手寒しさらしなや

○ をはすて山の峯の秋風

西行法師

雨雲の晴るるみ空の月影に

○ うらみなくさむ姥捨の山

本居宣長

ふる里を思へはいくへこえすきて

○ 見る夜の月もをはすての山

姨捨山の秋月

(信濃八景みすず音頭の内)

世々の歌人おとづれて、なみだをつむむ檜木笠、冠着山の麓路に、つれなき老のおもかけや、何にを田の面の月のかけ、鏡臺山にてりかへす、合せかが見もうらめしく、姥ひとりなく秋の風、ヨイくくくくヨイヤサ

戸隠山

戸隠山 長野縣上水内郡戸隠村は長野市を距る北西方約四里半の附近に點綴する高原部落で、表山と裏山とに分れ、表山は別に前山とも云ふ、集塊岩山で、其中には達棚、五十間長屋、西窟、髻摺、蟻の塔渡の奇勝がある。頂上を八方睨又は八方正面とも云ふ。裏山は表山と全く山相を異にし、高

妻(劔ヶ峰)乙妻、五地藏岳等に分れ何れも圓錐形の塊状山で、英閃安山岩から成り、海拔八千二百尺の高峯である。猶此の附近に飯綱、黒姫、班尾等の高山がある。

▽傳説 天照大神が、素盞雄命の亂業を怒り、天の岩屋に神隠れされた時、世は眞の闇となつたので、諸神相謀り、岩屋の前で神樂の舞誦をして、賑かな奏樂の音に、天照大神が岩屋戸を微に開かれたその瞬間、強力の神、手力雄命が岩屋戸を排して此の山中に隠したものである。
又一説には、手力雄命が、天から投げた岩石である等種々の説を傳ふる者もあるが、兎に角斯ふした傳説の生んだ山であつて、岩戸山、石戸山の別名もある。

戸隠神社

國幣小社戸隠神社は表山の麓にあり、手力雄命と九頭龍權現とを併祀し、本社と稱へるは寶光社、中社、奥社の總稱で奥社を奥の院、中社を中院、寶光社を寶光院とも呼ぶ。寶光社は戸隠村字寶光社に、中社は字中社に在つて、寶光社は天表春命、中社は天思兼命を祀る。思兼命は、手力雄命の外孫に當り、智に富ませ給ひ、岩屋戸開きの功勞神で、寛治元年四月即ち堀河天皇の御代に鎮座され、表春命は思兼命の神子で、手力雄命と共に天降り給ひ、御冷泉天皇康平元年八月鎮座されたが、奥社の鎮座は、今から(大正十年)二千百三十三年、寶光社は八百六十六年、中社は八百三十七年前で、奥社の相殿に齊はれ給ふたは一千餘年前であると云ふ。

△傳説 手力雄命は、筑前の國から紀伊に移り、更に科野(今の信濃)に

入り、伊那を経て目的とする戸隠に來られた。此の時山籠の沼中に立つて命を迎へる者があつた。命は其者に向ひ「汝は何者なるぞ？」と問ひ給ふと、「予は九頭龍なり、此の山に住して汝の靈魂を守る事八萬餘歳、今汝を迎えんが爲に此處に立てるなり」と答へ命を中腹の岩屋に奉じ、其の傍らに奉仕した。兩神の鎮座は孝元天皇の紀元五年頃である。

又一説には、九頭龍は命の分身であるとも云ひ、別に石戸守神とも呼んで居る。

○坊の由來 應神天皇の七年、犬養姓の一族此の戸隠山に燈り、奥社の傍に住居して神社に仕へ、子孫猶此處に永住したので、今も犬養姓を名乗る者があり、犬養の地名も存して居る。其後仁明天皇嘉祥三年、行々學問云ふ者

が登山して、佛法の興隆を圖つたので兩部となり、戸隠山顯光寺と稱し、天台、眞言二宗の僧侶は、神官と共に奉仕した。後中社、寶光社の建立されるに及び、一山の衆徒は三ヶ所に分れ、奥社十二坊、中社二十四坊、寶光社十七坊となり、佛法の興隆と共に神官何れも僧侶となつて、神職遂ひに姿を没するに至つた。従つて各社の諸式は、何れも神式から離れて佛式に移つたのである。が、文正の頃、山内の眞言、天台兩派の僧侶等が神社の法式に就て論争の末、双方の意見合はず、兩派の反目する處となつたのである。

▽宣澄神社 當時、天台宗の僧侶に宣澄と呼ぶ者があり、中院貳十四坊の一つ、東光院の住職をして居たが、一人天台の法式を主張して屈せず、應仁二年七月九日、遂ひに眞言宗僧侶の憎しみを蒙けて暗殺された。此の宣澄の死

に依つて、神社の法式は全く眞言宗の式に依る事となり、一時眞言宗の勢力は旭日昇天の如くであつたが、屢々災厄に遭ひ、漸次其の勢力は失墜し、夫れに反し天台宗に屬する寺院は再び隆盛に向つたが、時の人々は之を見て、宣澄の靈が眞言宗に崇つたのだと云ひ、一社を飯綱山麓怪無山に建立して宣澄の靈を祀つた。即ち、現在中社の傍に在る宣澄社が夫れである。

▽其後、眞言宗の勢力は全く地に落ち、遂ひには跡形も無く亡びるに至つて、天台宗獨占の地ニ化したのである。が、偶永祿弘治の兵火（川中島戦争）の際、同山は殆ど全滅し、各寺院僧侶を始め、人々皆、鬼無里又は越後方面に遁れ、多くの寶物も空しく烏有に歸し神の御威光も爲に薄れざるを得なかつた。更に又其後、太閤秀吉の朝鮮征伐に従軍して功のあつた上杉景勝が、吾

が凱旋は戸隠神社の御加護であるにて、御社を造り替へ、後徳川時代となり新たに神領として一千石を得、神の御威光再び世に耀くに至り、安永九年、寶光院の十七坊退轉して、中院から十二坊を割いて寶光院に移し改めて三院三十六坊としたが、明治維新に至り寺號を廢して院と社に改め、奥院十二坊を中院に合し、兩部を廢して神社と改め、然して今の國幣小社の社格を得るに至つたもので、此の奥院十二坊の跡は、今猶奥社道中程の西側に殘存して居る。

○寶物什器 我が國神代史上の參考となるべき物頗る多かつたが弘治、永祿の合戦に燒かれて、現存する物は左の如くである。

○後伏見天皇御宸翰一幅 ○後醍醐天皇同上幅 ○後光明院天皇同上幅 ○

後光嚴院天皇同上幅 ○正親町天皇懷紙御製一幅 ○後陽成天皇同上幅 ○後西院天皇同上幅 ○後土御門天皇色紙御製一面 ○天明上皇御製扇面俳句一面 ○武田晴信願文一通 ○天手力雄命岩戸開圖狩野休心筆一幅 ○昔事緣記一卷 ○顯光寺流記一卷 ○聖德太子真蹟一字一塔法華經四卷 ○天海僧正免許狀一通 ○天海僧正感狀一通 ○權現様御法度一通 ○台徳院掟狀一通 ○天職冠錄足公眞影一幅 ○傳教大師眞影一幅 ○犀角御筒一握 ○手力雄神圖一個 ○武田晴信面規一個 ○印子鈴一個 ○古鈴一個 ○家康乗鞍一掛 ○鏡一掛 ○轡一掛 其他、刀劍には菌御作、信國元祖太郎助作、加賀國住藤原國平作、攝津國住源氏作、家義作、泰龍齊宗寬作、備後正光作、兼常作がある。

○神札・神籤 戸隠神社は、水神又は農作保護神とされ、神札、神籤を需むる者多く、殊に毎年一月三日の神告種兆は、其年の豊凶を豫言するものとして同社を知る者は悉く是を需めて保存し、又夏期干魃の際には各方面から雨乞

ひに来る者多く、奥社原の東端にある「たね池」から水を借り、夫れを道中休まず持返り干魃の地へ撒けば直ちに降雨があり、降雨が無くても地が焼けぬと言はれて居る。神札の種類は、五穀豊熟御祈禱神札、養蠶御守、耕作御守、蟲除御守、諸難除御祈禱御守、開運御祈禱御守、火除御祈禱御守、川除御祈禱御守、水拔留御祈禱御守、鎮火御祈禱御守、神樂御祈禱御守、大守札、懐中小守札等である。

○神樂 神樂は平安朝式の舞事で、中社、寶光社、日ノ御子社等で祭日や、式日に行はれ、又參詣者の希望で行はれる事もある。種類は、降神行事、水繼行事、御禊行事、御返幣の舞、三劍行事、巫舞、隨神舞、岩戸開、直會舞の九種で、此の外に、吉備樂倭舞等があつて、神樂九種は、其の増減に依り

大中小の三種に大別し普通大神樂、中神樂、小神樂と呼び、大神樂とは、神樂九種に吉備舞、倭舞を加へたもので、中神樂は九種の中から三劍行事を除いたもの、小神樂は、中神樂から水饗行事と御返幣舞を除いたものであるが、一回の奉納料は、大々神樂は金十五圓、金二十五圓、金三十圓、金五十圓と定めてある。

○祭典

○一月一日奥社新年祭、元始祭、講社祭、○一月二日中社新年祭、元始祭、講社祭、神樂、○一月三日寶光社新年祭、元始祭、講社祭、神樂、○五月十四日中社新年祭、神樂、○五月十五日奥社新年祭、大和舞、○五月十六日寶光社新年祭、神樂、○六月三十日大祓式、○八月十四日中社例祭、吉備祭、神樂、倭舞、○八月十五日奥社例祭、吉備祭、○八月十六日寶光社例祭、神樂、吉備祭、倭舞、

○八月十八日日之御子神社例祭、神樂、○十一月二十二日中社新年祭、神樂、○十一月二十三日奥社新年祭、大和舞、○十一月二十四日寶光社新年祭、神樂、○十二月三十日寶光社(午前)中祓(午後)越年祭、○十二月三十一日大祓式、奥社除夜祭。

○足形の池 手力雄命が、岩屋戸を排して此の池に隠そうとした時足を踏外して出来たのが此の池だといふ。

○弘法の投筆 戸隠連峯中の西岳に在つて、弘法大師が此の山に登山され更に、西岳に渡ろうとされたが、急ふしても途が無く渡る事が出来なかつたので、手にした筆を投げて、渡つた印にしたと云ふ。其筆跡が岩壁に印せられて居る。

○びく尼石 一人の尼僧が、女人禁制の御山と知りつゝ此の山に登山し、正

に奥社の拜殿に着かうとした時、神罰が現はれて尼僧の姿は石に化して終つた。何時頃の事かは不明であるが、現在の奥社々務所内登山口に在る。

○さかさ柱 字豊岡の清水氏宅地内に在り、承元丁卯の頃、親鸞上人が同家に泊り、其紀念として枝を池に挿されたのだと云ふ、高さ九十三尺、周囲三十六尺、稀に見る大木である。

○弘法石窟 字豊岡の西方、荒倉山の溪間に在り、大小數個の石窟から成り、弘法大師修養の地と傳へられ、奥の窟に大師の石像がある。

○釋長明の墓 別に火定塔とも云ひ、康保年中の人で、行者かと思はれ、自ら薪を積んで焚死した事に依つて知られて居る。

○見の塔 墓碑に「見」の一字あるのみで、本朝孝子傳に關係するやうに傳

えるが、事實は不明である。

○不動瀧 字大洞澤にあつて、高さ六丈、巾八尺ある。

○千丈瀧 裏山の中央部溪間にあつて、南向の瀧で、高さ四十二丈。

○百丈瀧 奥社嶽即ち、表山の西南部にあり、高さ二十四丈、巴九尺、楠川の上流である。

○黒瀧 西岳の中腹に在り、高さ十八丈、巾一丈八尺。

○荒倉瀧 字大瀧にあつて、高さ十八丈、巾八尺。

○巴岩 字蕪尾にあり、木曾義仲の妾巴が、奥社へ參詣しやうとして此處に至つたが、女人禁制の地で行けぬので、此處で遙拜し、傍らの石に箭の根を以つて佛號を彫付けたのだと云ふ。

○猿丸太夫宅跡 字猿丸城にあつて、正徳の頃迄は残礎明かであつたが其後、開拓されて今は畑に化して居る。

○見真大師の舊跡 字大中にある。

○西光寺跡 眞言派の大寺で、戸隠山麓に在るが、單に礎石を存すのみである。

○日之御子神社 中社部落の入口にあつて、祭神は天細女命である。社頭の櫻樹には珍しい傳説がある。

○高山植物 主なる物左の如し。

○飯綱原一帯 梅鉢草、黄輪花、毛氈苔、水芭蕉、水柏、鏡苔、耳搔草、檜扇溪蓀、山茺、莞、螢莞、眼子菜、香蒲、水苔、姫羊齒、狸藻、房藻、睡蓮、品字藻、黄苑、反魂草、敗醬、丸葉萩、節黒田王、白玉草、松虫草、白茸草、更級外麻、伶人草、烏兜、黄釣沿草。

△中社奥社間 杉蘇、龍膽、柳蘭、戸隠燈臺、山鳥羊齒、九段草、丁字菊、松虫草、ひかげのかつら、姫狸藻、水楡、やちすきらん、萬年杉、小谷渡、猪の手、雄羊齒、澤胡桃、春楡、きはだ、假蘇、いらくさ、三葉漆。

△表山一帯 山毛櫨の樹皮に文字苔、地圖苔、霧苔、鳥膚苔、月夜茸、虫捕籠、姫雲間草、岩傳多、石茸、山荷葉、白根葵、兜苔、黄花教盛草、米梅、岳蓮、高嶺七竜、深山米草、岩インチン、四葉鹽釜、姫蓮細辛、深山マモコナ、米つゝじ
△裏山一帯 兔菊、深山紫、白山一華、燕萬年青、御前橘、クロベ、タウヒ、三葉、黄蓮、蘇桃、戸隠神麻、イワヒゲ、トガクシデンダ、黒桃草、一葉蘭、姫杉蘭。

夏期大學 近時の新傾向として、智識階級の間に登山熱が勃興するに共に避暑地を山間の高原地に求める風が盛んになつた。之と同時に各地に夏期

大學が開設されて居るが、戸隠山は前記の通り海拔八千二百尺、俗塵遠くして、清澄せるオゾンの大氣を呼吸し乍ら修養すれば、避暑に乗ねて心身の練磨が出来るので、大正九年以來寶光社に夏期大學の開設を見たのである。期間は七月廿五日から八月七日までの間で、僅少の會費を納めれば聽講隨意であるから、家族同伴避暑芳々の勉學も有益であらう。講師は帝大、早稻田、慶應等の諸大學教授を囑託したとの事である。提唱者は原山氏で、地元及び長野市の有力者が後援して戸隠夏期大學會を組織して居る。

○旅館 是舊院坊の變形したもので、館主は神官であるから其の名残を其氏名に止めて、何々館主他の何磨と云ふ様な名前である。中社に十八、寶光社に十四あつて、一軒約百人を宿泊せしめ得る。

▽宿泊料 上四圓、中二圓五十錢、下一圓二十錢

▽畫食料 上二圓、中一圓三十錢、下六十錢

猶夏期自炊の便もあつて、一ヶ月の費川は會費を除き金十圓位。

○山内巡遊 をするには案内人もあり、日戻り一圓七十錢、宿泊案内料二圓七十錢、但し登山者十人に對する一人當りである。

▽此の旅館附近一帶に老杉あり、高さは十二丈、巾三丈餘の大木で面も三本杉と稱して、何れも木が三本に分れて居る。樹齡は少く共八百年位ひだと云ひ、椈、山毛榉等にも大木がある。奥社道へ入ると、初めは根曲竹の藪であるが、逆川の附近から喬木帯に入り、老杉の並木は晝猶暗く、其間に檜もある、奥社は中社から一里と言はれ、お山懸は其處の社務所から出發、連柵、

五十間長屋、百間長屋、西窟、髻摺などを経て、蟻の塔渡りの嶮を越へ、頂上の八方睨に達する。其處迄が表山で、頂上は海拔七千五百尺ある。夫れから峰傳ひに蝶繫、風切岩、へさき岩、表正禪、裏正禪の各峰を経て不動に下る。其處に不動明王が安置されてある。其處から五地藏岳を経て高妻、乙妻等に到達する。之を裏山と云ふ。五地藏岳には、森田實丹氏の設けた小屋があつて登山者は此處に宿泊するを常とする。高妻山は海拔八千二百尺、乙妻山は八千尺あつて、頂上からは富士を初め、甲信群馬國境の連山から、日本アルプス連峰、越中立山、其他附近連山、日本海等が見え、陽の出没陽の壯觀又美の極である。

一不動から一杯清水、不動瀑、帯岩、御祓水、小雀原を経て、奥社原に出

る。戸隠村營の牧場があつて、之でお山懸は終るのであるが、一不動から高妻迄に釋迦、三文珠、四智賢、文彌動、七觀音、八薬師、九勢至、十阿彌陀等の名所もある。

中社は海拔四千三百尺、盛夏にも蚊を見ず、夫れから一里半程を下ると、寶光社がある。此處は海拔四千尺、矢張り蚊を見ず、従つて盛夏學生及名士の勉強避暑に来る者が多い。尙附近に長野水道の水源地がある。

○登山道 是長野市から一番便利である。それは最近安樂椅子式の山籠の設備が出来、又自動車の開通の計劃もあるからである。以前は大町方面から越後へ通ずる街道として、柏原からの登山が便利であつたが、途中の景色から云つても長野市からの方が宜しい。長野から其日歸りの登山も出来るので

あるから、是非御清遊をお勧めする。登山道に當る、芋井村字泉平に、
 ▽神代櫻と云つて、神代から傳はつた云ふ、有名な櫻の古木があつて、樹
 下の石碑には西行法師の詠んだ「此里に神代の櫻あればこそ、世に裾花と人
 は云ふなり」の歌が彫つてある。

謡曲紅葉狩の由來 長野市の西北方約三里半、戸隠村の西南方一里
 半の附近、上水内郡榑村に在る。鬼女紅葉は、同村上祖山字平出の出生であ
 ることも、京都の官女が罪あつて貶謫された者だとも傳へられて居る。非常な
 美女で而も戦術武術に勝れて居たが、鬼女の名を取つた丈に、彼女は盜賊も
 殺人も行ひ、或る説に依れば、人間の生血を吸つて無上の好物にして居たと
 ある。之を征服した者は、源頼義、又は源満仲だといふ説もあるが、實

際は平ノ維茂であると云ふ。維茂將軍が越後へ赴任の途次、戸隠山を通過し
 た。頃しも秋の中旬で、霜に早い信濃路の山は、紅葉で埋もれて、其風景轉
 た旅愁を忘れしむるのであつた。此時道に一人の美女が病に苦しんで居るの
 で、維茂が之を介抱しようとする、忽ち鬼女の本性を現はして將軍を刺さ
 んとし、之と同時に附近から鬼面を裝ふた異形の手下共が大勢で將軍の一行
 を襲撃し、財物を掠めんとしたので、豪勇の維茂將軍は太刀を抜いて鬼女に
 切り付け、遂に賊共を改め亡ぼして道路を安全にしたと云ふ事である。此點
 は鬼神お松の傳説と似て居るが、昔は斯う云ふ種類の女賊が、色仕掛けて旅
 人を害めたものらしい。

○鬼女の遺跡 同村大字榑原字志垣の五輪坂と稱する處に、方五間餘の五輪

塔があつて、平維茂が鬼女紅葉の屍を埋めた所だと云ふ。又字釜岩には、入口高さ四尺、中部の高さ三間、奥行八間に及ぶ岩窟がある。之が鬼女の棲家で、鬼岩窟とも云はれて居る。夫れから下つて、裾花川の傍に志垣と稱する家がある。其處に釜壇岩と云ふがあり、高さ二十間餘で、前面に中央に穴がある。之を鬼女釜壇、釜岩山とも呼ぶ。又同所の朝ヶ原と云ふ處は、鬼女が朝夕散歩した處だ云ふ。

○大昌寺 柵村字柵原にあつて、曹洞宗に屬し、釋迦如來を本尊とするが、鬼女紅葉の位牌、其他遺物がある。天正年間福平城主溝口伯耆守の階基で、正保二年僧松巖是を再興して大昌寺と名付けた。一時は善光寺と相並ぶ勢力を有して居たが、交通の不便は現在の衰頽を餘儀なくしたのである。

附近名所舊跡

▽福平城跡 柵村大字柵原字福平に在り。壽永年間木曾義仲の臣、今井兼平が築いたと傳へら、後永正の頃、溝口伯耆守居城としたと云ふ。依つて同地には字今井、字溝口の名があり、又同名の氏を遺す。

▽隱岐殿屋敷 柵村入字柵原字倉平にあり。佐々木源三秀義の孫隱岐太郎左衛門政義入道願の居住した處である。

▽木曾殿洞 鬼無里村東京區にあつて、木曾義仲の宿所跡である。

▽木曾殿城跡 鬼無里村松原區にあり、木曾義仲の據つた處だと云ふ。

▽新倉山 鬼無里村上下新倉、兩區に跨り、鬼女紅葉の據つた處